

389

73



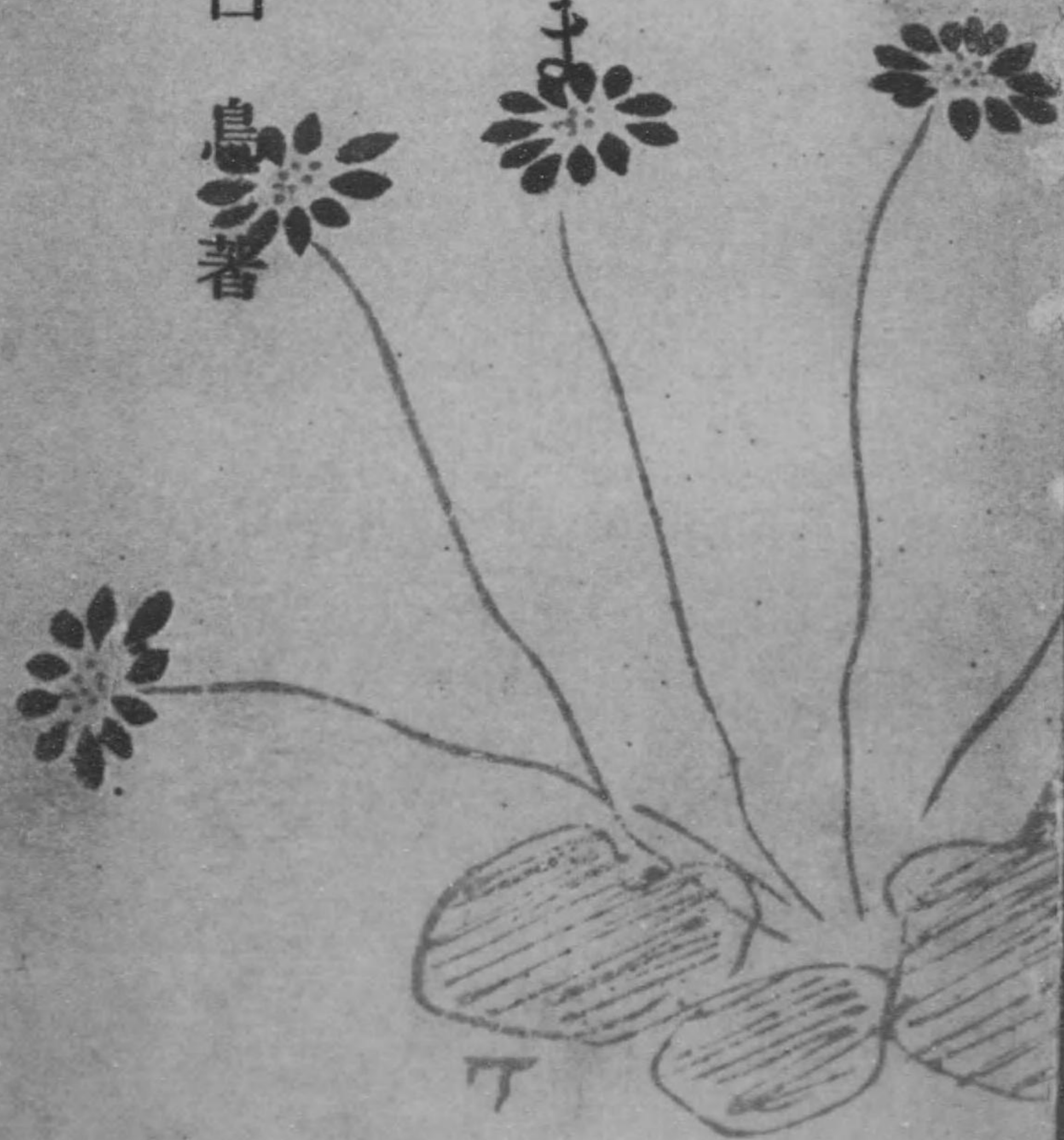
始





人  
と  
ま  
ま  
ざ  
ま

正  
宗  
白  
鳥  
著



金  
星  
堂  
出  
版



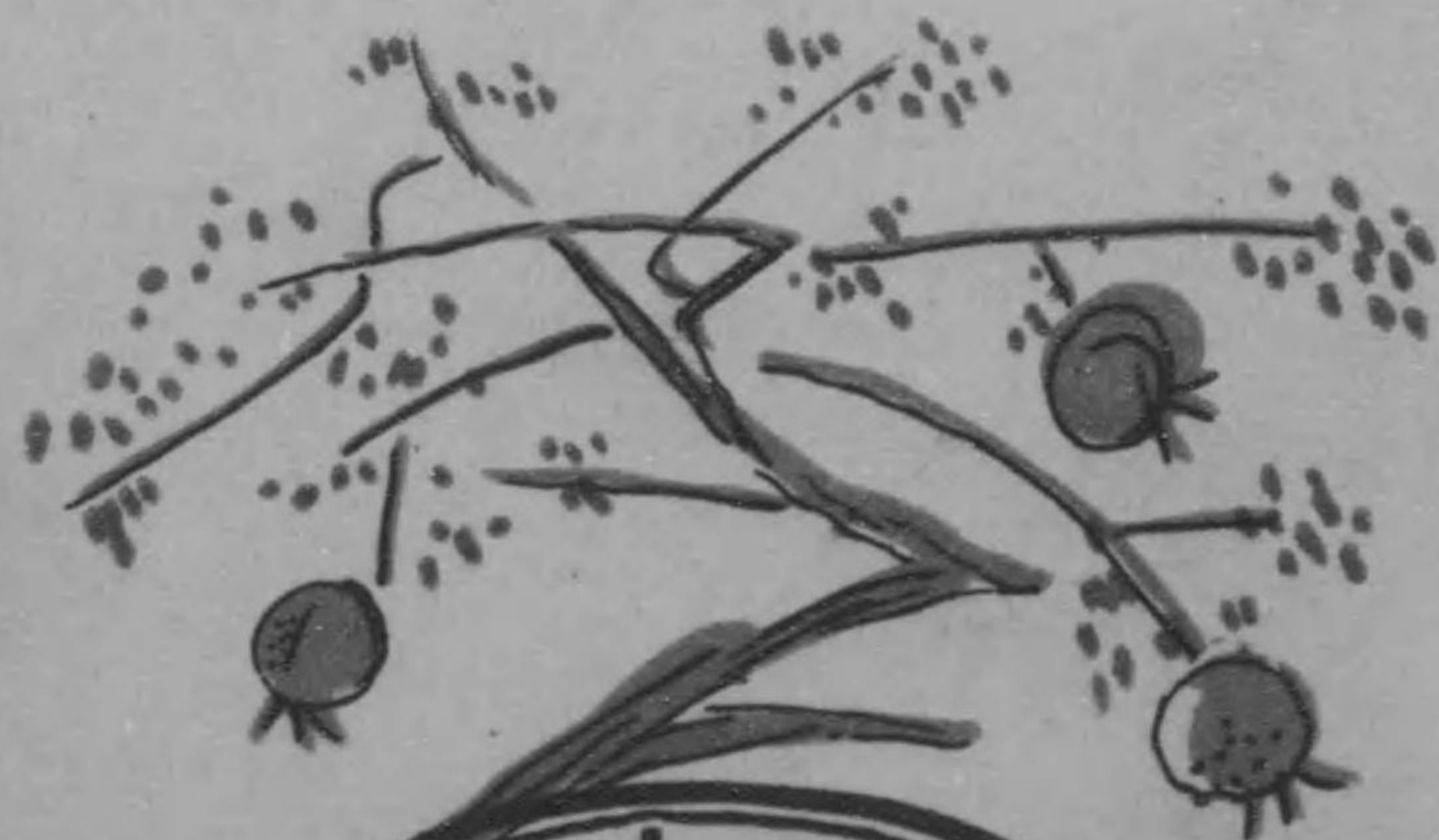
389-73



金星堂名作叢書(3)

鳥  
著

ま



大正  
11. 3 27  
金 堂 叢 書





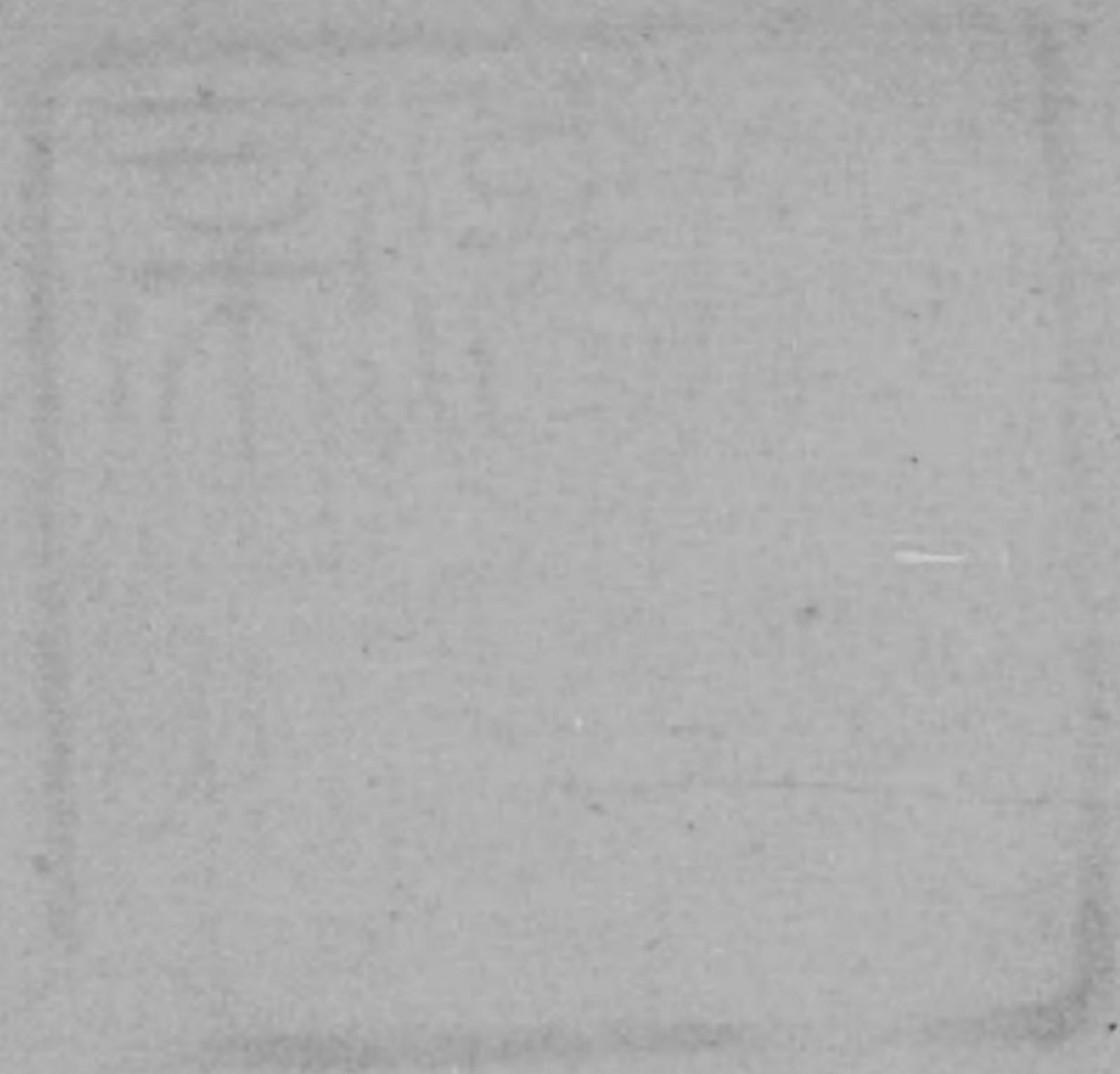


ぐ

正宗白鳥著







目次

人さまづく……………二

妹の縁談……………一四



人  
さ  
ま  
ぐ



秋の末から春先きまで、眺望のいゝ貸別荘に住んでゐた高山夫婦は、借受けの期限の切れたのを機会に、一先づ大磯を引上げることにした。

立際には、家主の狡猾と因業とをまさしく見せつけられたので、大磯といふ土地全體について不快な感じを起させられた、天気も悪いし、荷物の整理にも豫想以外に手間取るので、一日延ばして、翌朝緩くり出立したいと考直した。彼等たちは、何の氣なしに家主に向つてさう云つて許しを乞うたのであつたが、家主は「それは困ります」と、頭から拒絶した。他の借手に契約をしてゐるので、その人が明日にも東京から来るかも知れないから、それまでに家の掃除をしたり、破損したところを修繕したりして置かなければならないと云ふのであつた。明日の一番で立つと云つて

も愚圖々々云つて聞入れなかつた。

「一日でも期限が延びれば半月分家賃を取るのが土地のきまりだと、此間家主が云つてゐました」と、まつ子が云つた。

さうなると、彼等は一瞬もその家にゐるのがいやになつたので、とに角大急ぎで荷づくりをすることにして、偶然來合せた知合ひの土地の女にも手助けを頼んだ。運送屋の人夫をも雇つて來て、やうやく日暮前に停車場へ荷物を送り出した。後片付は手傳ひの女に頼んで、彼等は心當てにしてゐる發車時間に遅れぬやうに急いで出掛けてゐると、家主は手傳ひの女を通じて、まつ子に疊の修繕費を要求した。炬燵の火で焼焦がしたところがあるので、辨償しなければなるまいと、まつ子も思つて居たのであつたが、數日前家主に知らせた時には、「まあ仕方がありません」と、家主自身寛大な口を利いてゐたのであつた。



忙しい間際に争つてはゐられないので、高山は要求された一枚分の墨代を拂つたが、あまりに忌々しかつたので、「そのかはり無替えをしたら、今の墨は手傳ひの人にやつて下さい。それから、井戸の樋だの物干竿だの、私が買った物は一切あの人にやることにしますから」と、手傳ひの女にも後で持つて行くやうに云つて置いて停車場へ急いだ。

食卓とか、洗ひ物の臺とか、その他大工に頼んでわざ／＼拵へさせた嵩張つた物は、打遣つて置くのも惜しいし、預け場所を捜す暇もなかつたので、方法のつくまで假りに運送屋に置いて行くことにした。

汽車に乗ると、夫婦は一安心した。

「大磯の宿へ泊つて、明日の朝ゆつくり立つてもいゝんだが、大磯といふ土地はつく／＼いやになつたから、一刻も早く離れた方が氣持がいい。二度とこんな土地へ

は来ないよ」

高山はさう云つて、細雨のしめやかに降つてゐる窓外を眺めて、滞在中彼れの散歩の目あてになつてゐた小千疊や海岸の松林に別れを告げた。まつ子は身心の疲労でガツクリして殆んど口を利かなかつた。根を据ゑて落着ける家がなくなつて、あちらこちらと轉々としてゐる浮草のやうな生活は、彼女には詰らなく思はれた。二人とも、朝牛乳を飲んだばかりで、午餐も食べてゐないので汽車に乗ると、頻りに空腹を感じだして大船へ来るのを待ちかねて鯛飯を買つたが、さて箸を採ると、まつ子の方はむかづいて充分に腹を満たすことが出来なかつた。

彼等はずまりは、東京へ出て、空家捜しをしなければならぬと思つてゐたが、今ほとに角まつ子の故郷である玉市へ行つて、彼女の父母の家に寄寓することにしてゐた。彼等は近年其家を旅から旅を渡る際の中繼ぎのやうにしてゐて、雑多な書籍や



衣類や世帯道具などを預けてゐるので、季節の移りかほりには、衣類の預けかへをして來なければならなかつた。で、まつ子は云ふまでもなく、高山に一年に一度くらは其家へ立寄つて、數日あるひは數週を過すのを例としてゐた。其家を根城として、近傍の山河溪谷を見て歩いたり、あるひは温泉に浴したりすることもあつたが、海岸に生れながら（あるひはそのために）海の眺めよりも山の眺めを好んでゐる彼れは、甲信の山地に親むたびに清新な刺戟を受けて、懶い眠りから醒めるやうな氣持がした。輕井澤の高原に住んでゐた間に屢々そんな氣持がした。富士の晩秋の田野を旅して、精進湖畔の見窄らしい宿に泊つて、雨中の半日、宿の窓から紅葉の山を見詰めてゐた時、寂寞の靈氣が周圍の山の底にも、彼自身の心の底にも動いて、眞悲焦燥の煩惱も一時搔消されるやうな氣持がした。巖澤から富士川を下つて身延の靈域に辿り着いて、獨り御草菴の遺跡に立つて、蒼鬱たる樹間から、暮れかゝる空

を仰いだ時には、宗教心に乏しい、ことに日蓮宗の如き者を好まない彼れでも、宇宙に動いてゐる尊い者の前に跪きたいやうな氣持がした。（常住の住家である里へ下ると、直ぐに昏亂して、一日の安き心もなく、心に何の光も見られないのが不斷の彼れの習ひではあるが）

彼れは、半年足らずの固定した大磯の住居に飽果て、春の光の差す頃となつた山の色を見たくなつて、荷物の整理をかねて、玉市へ向ふのを喜んでゐたのであつたが、今度はその外の俗用をも有つてゐた。それは、數年來行惱んでゐたまつ子の弟の縁談が纏つて、三月中には結婚式を擧げるといふ知らせに接してゐたので、彼等夫婦もその席に列しようと思つてゐたのであつた。高山は數年前止むを得ない譯で、妹の結婚のために柄にない世間的の斡旋をして、堅めの盃の席へも披露の席へも、親代りに出て行つたことがあつたが、その他には、幾人かの弟の結婚の時にも、



親戚の結婚の時にも、顔を出したことは一度もなかつた。葬式にはたびく、列席しても婚禮の式場へ行くことを彼れは好まなかつた。しかし、まつ子の弟の良三には荷物の處分などについてたびく、面倒を掛けてゐるのであるし、世間並の習慣を何よりも大事に思つてゐる良三の父親は、嗣子の婚禮には、親戚一同の列席を切望してゐるらしくもあつたので、高山の豫定の日程には、良三結婚式出席と、大きく書記されてゐたのであつた。まつ子は先日東京へ日返りで行つて來た時に、三越へ寄つて、祝ひの品を買調へて來た。話の種の少い夫婦の間には、今度の縁談の決るまでのイキサツや、結婚後の青木家の變化の豫想などが屢々話題に上つてゐた。

「今度こそあなたとお別れ見たいものだ。これから後は、今までのやうな詰らない戯談を書いた手紙の遺取りは出來なくなります」と、まつ子は感傷的な氣持で書いた葉書を良三に宛て、送つたりした。

「氣樂にN市へ遊びに行けるのも、これが最後見たいなものだぜ。今度も式の前は何日泊つてゐてもいいが、式が済んだら直ぐにお暇にしなければならぬよ」と、高山が云ふと、

「さうですとも。私もこれからは今までのやうに浮かり親の家へ行けなくなりますよ。良三の家になつてしまふのですから」と、まつ子も云つた。

「おれたちの荷物だつて、何時までもあの家へ厄介を掛けとく譯には行かない。第一書物なんかおれにはどうでもいいんだからな。今度の機會にどうかして仕末をつけたいものだ」

「諸道具が邪魔なら、筆筒なんかはおれの方で買つてもいいつて、お父さんは云つてゐるのだけれど、それもちよつと變ね」

「親爺さんがお前のために自分で選擇して買つて呉れた物を、自分の方へ買取ると



いふのも變だが、おれが邪魔者あつかひして、いくらにでも賣飛ばすといふから、勿體ないと思つてゐるのだらう」

「世帯道具が邪魔だなんて、私の家にはいくら道具があるものぢやない。大抵の家にはもつといろんな物がありますよ。あなたが女の身になつて、家の用を足してゐたら、道具のない不自由さが分るのだけど」

「おれは昔自炊してたことがあつたが箸と茶碗と土鍋と七輪とくらゐで簡単なものだつた。今でもどこかの山へ入つて自炊して見たいと思ふこともあるよ。こゝらが親に似てゐるのであらうが、おれは煎餅布團にくるまつて寝てゐようとそんなことは平氣だ。先日もAさんが訪た時に、行李の上に鞆を載せて机代りにしてゐるのを見て、どうも簡單なものですなあと、驚いてゐたつげが、おれには紫檀の机なんかは無用な長物だよ」

「そんなことは自慢になりやしないわ。生活は豊富に氣持よくしようと思つて心掛けなければ働く張合ひがないぢやありませんか。文明の利器を利用して、無駄な労力や費用ははぶいて、氣持ちよく暮すのが賢い人のすることなのよ」

「それはさうだが、おれはも一度生れかはつて、はじめからやり直さなければ生活を愉快にすることは出来ない。E市の親爺さんなどは、古い因習だか何だかど、佛か鬼かのやうに頭の中に取り付けてゐるのだが、おれにはそれと違つた佛か鬼かど、頭の底に巢をくんでるから、もうどうしようもないよ」

「形容はどんなにもつけられるでせうけれど、生きてゐる間は今からでも生甲斐のあるやうに暮らさなければ損ですよ。……私だつて、もつと、いろんなことを知りたい。あなただつてまだ老い朽ちた歳ぢやなし、もつと世の中のいろんなことを知らなきや損ぢやありませんか。……私のお父さんはあんな風に、良三なんかのことば



かり考へて、二十五にもなつた男が、ちよつと散歩に出るとか、活動寫眞を見に行くとかするのさへ、心配して、容易に許さなくらいなのでですけど、それが子供のための幸福だか何だか分りやしません。私だつて、女學校を卒業した時に、學校の成績もまあ／＼悪い方ぢやなかつたから、先生にも勧められるし、自分ももつと學問したいつていふ氣になつて、女子高等師範へ——その時は、女子大學とか英學塾とかいふやうな學校はお友達の中で評判になつてゐなかつたの——入りたいと思つてお母さんに頼んで、お父さんに云つて貰つたことがあつたの。えうすると、お父さんは私を呼寄せて、何といふ不景見だと血相變へて怒つたんです。親に逆らうつて氣は微塵も持つてゐなかつた時分だから、泣寝入に諦めて、裁縫でも習ふ氣になつただけれど、今になつて考へると、女だつて出来ることなら、學問をした方がよかつたの。今更後悔したつてはじまらないけれど、女も獨立して生活して行けるだ

けの藝は、身にそなへてゐなければ、安心して世が渡れないとしみ／＼思はれることがありますよ。親や兄弟の人情を手頼りにするのは心元ないことだと私も思ふやうになつたんです。良三だつてお嫁さんが出来たり、子供が出来たりすると、次第に人間が變つて来るでせうし、それがまた本當なんでせう」

「おれだつて何時死ぬるか分らないしね」と、高山は云つた。

子供の無い上に世間の狭い彼等は、ことにまつ子は、日常心を紛らすすべがなかつた。そして、睡眠時以外には、生きてゐる人間として絶えず動いてゐる彼女の心は、自然と夫の一言一行の上に注がれた。日に月にさうしてゐるうちに、夫の人となりについて、彼女自身の解釋が、自からつくやうになつてゐた。世間の人は何と云つてゐようとも、當人が自分をどう吹聴してゐようとも、夫は手頼りにならない人、詰らない人、お坊つちやんで利己的な人、何かしら祕密を持つてゐる人、こん



な人、あんな人と、彼女の心では思はれるやうになつてゐた。夫が以前云つてゐたこと、この頃云つたこと、矛盾してゐるのに氣がついたり、夫が知つたか振りで豫言したこと——たとへば、××なんかは將來見込みのない人間だと、夫がひとり極めにしてゐたことが外れて、その××なんか盛んな人氣を取るやうになるのを見たりすると、夫の言葉にも信用が置けなかつた。夫がをり／＼常識外れの不思議な事をするのも、彼女に取つては面白く感ぜられなかつた。

子供の無い上に世間の狭い彼等の心や目や耳は、互ひに探偵のやうに相手の上に注がれてゐた。

東神奈川から八王子行の汽車に乗替えると、その薄暗い粗末な列車にはスチーム

が通つてゐないので寒かつた。二等車には、彼等の外に色の白い官吏風の男と、古いトランプを着た髯は荒いが、眉の薄い、青肥りのした田舎くさい老人とが入つて來た。汽車が動きだすと、老人は誰れに云ふともなく、此間中から寒氣がぶり返したことを歎息したり、不景氣がひどいのに旅費の減じないことを訴へたりしてゐたがやがて若い男に向つて、

「あなたはどちらまでお出でになります」と、馴々しく訊ねた。

「八王子までです」と、若い男は簡単に答へた。

「八王子も生糸がいけなくなつたので、町を通つても、一二年前のやうな活氣は見えなくなりましたね」

「さうでせう」

「失禮ですがあなたは、横濱の會社へでもお勤めになつてゐらつしやるんですか」



老人があまりに馴々しいので、若い男は顔を曇らせて、「まあさうです」と答へたが、老人は相手の無愛相なんぞは氣にも留めない風で、

「私は忤が今度濱の××會社へ奉職することになりましたので、今日様子を見てまゐりました。あなたも御存じでせうが、櫻木町の停留所の近くに新築されて、なか／＼立派な會社になりました。社長さんにもちよつとお目に掛りました。百萬といふ資本を運轉する人はちがつたものだ。自然と威嚴が具はつてゐますな。忤は昨年××大學を卒業してから暫く東京の辯護士の家に勤めてゐましたが、法律いじりはいやだつて當人が申しますから、昨年きりで暇を貰つて今度のところへ出ることにいたしました」と、話を續けたが、若い男はもう返事もしなくなつた。老人は煙草を出して火を點けた。そして、相手欲しさに高山の方へ目を向けて、「一言問ひを掛けた。

高山は、煙草を持つた老人の左の指が曲つて自由な働きを缺いてゐるのに目を付けて、その顔付をも思合せて、癩病患者ぢやないかしらと疑ひだした。申譯だけの受答へをしながらくよく見てゐると、薄明りに映つてゐるその皮膚の色は無氣味であつた。

「夜汽車ぢやお困りでせう。それに八王子からは込合つて居りますで、緩くりお休みなさる譯にやまゐりますます」  
「さうですとも」

高山は身延の深敬病院で見た患者の顔や、杏掛で見た草津行の患者の馬上の姿も、疲れた頭の中に思起した。紅葉のあさやかな山に圍まれた病院の廊下では、むくれた顔のくすれかけたやうな患者が囁しく、聲を立て、互ひに笑ひ戯れてゐた。女の頭も聲も洩れてゐた。



「汽車には乗せて貰へないので」と、人の話すのを聞いて、雇ひ馬に乗つてゐる醜い患者を見た時に、高山はその患者に同情するよりも先づ、どんな目に會つても生きられるだけ生きて行かねばならない人間のいたましさを感じた。呪ひたいやうな気がした。さうして、患者同士で笑ひ戯れてゐる病院の廊下こそ、人生の眞の姿であるやうに、彼れは感じてゐるのであつた。さまざまな人間の平素の饒舌も、病院の廊下の氣晴らしの戯れと同じやうに彼れには思はれてゐた。あれもこれもこの世の中の出来事であるのに關はらず、劇場の舞臺の席よりも、あるひは花嫁花婿の相並んだ美しい姿よりも、瘦馬に跨つた草津行の患者の状態に、一層多くの人生の眞實が現はれてゐるやうに、どうかすると、彼れは思つてゐた。

「八王子から先きは景色がよすがすが、この邊は晝間でも眺めの面白い所は御座いません」老人は聞き手の無愛相に頓着しないで、何かしら口を利いてゐたが、町田

といふ所で、皆んなに挨拶して汽車を降りた。

高山は向う側に腰を掛けてゐた老人から受ける不快な刺戟から免れたのに一安心して、大きな合財袋に寄掛つて目を閉ぢた。

八王子で乗替を待つ間は、待合室のストープにあたつて、いろ／＼な男女のいろ／＼な話に耳を傾けてゐたが、久振りで異つた社會の話聞くのは、彼れにも興味があつた。

「僕は此間東京へ行つた歸りに、上野の近所の洋食屋で、ひとりでウキスキーを一本飲んで、新宿までの切符を買つて電車に乗つたら、どうにも溜らなくなつて眠込んぢやつて、上野から東京驛の間を三度行つたり來たりしたよ。車掌に起されて目を開けると、今度こそ失敗しじらないやうにと、一心になるのだが、どうにも頭が云ふことを聞かない。直ぐに夢になつちまふんでね。しまひには車掌に大小言を喰つち



やつた」

精肥りのした中老の田舎紳士が、さう云つて大笑ひをすると、あたりの人もどつと笑つた。

「寒いと思つたら、雪になつた」と、ある男が云つたので、皆んなの目がガラス窓の外へ注がれた。

高山は外へ出て闇の中に降頻る雪を見て来て、「一日延さなくつて却つてよかつたよ」と、まつ子に向つて囁いた。因業な家主に對する不快な感じも自から消失せた。やがて彼等は、かの酒好きの紳士と一緒に夜行列車に乗つた。窮屈な寝様をしてゐる先客の中へ割り込んだ彼等は、スチームの過度な温みや人いきれのために、覆れてゐる頭に痛みを覚えるほどであつたが、かの紳士は二三驛を過ぎる間に口を開けたまゝコクリ／＼居睡りをしだした。山を登るにつれて雪はますます繁くなつて

ゐた。をり／＼息拔きに窓を開けると、雪を伴つた冷たい風が吹入つたが、それが高山には氣持がよかつた。

「これで向うへ着きさへすれば、安心して眠られる家があるからいゝやうなものゝ、こんな寒い時に、當にするところがなかつたら心細いだらうな。どんな窮屈なところでも、屈托しないで熟睡の出来るやうになつたらいゝのだが、おれはどうしても眠れない」高山はだるい欠伸を漏らしながら、まつ子に囁いた。半ば眠りに落ちてゐるまつ子に云つたつて效のないことだつたが、一口でも術ない思ひを口に出して見なければ、退屈の遣り場がなかつた。

彼れは窮屈な寝様をしてゐる一人々々の顔を見て夜を過してゐたが、室内の顔一つから記憶を呼び起されたのか、ふと東京の尾越夫妻へ宛てゝ音信をすることに、靴の中から封緘葉書と萬年筆とを取出した。尾越夫婦とは去年の夏輕井澤で



知合ひになつたので、年末に東京へ行つた次手に、その家を一度訪ねたこともあつた。

「お二人で大磯へお出でになるといふお話があつたので、心待ちにしてゐましたが、そのうち小生等は土地に飽いて來ましたから、今日大磯を引上げて、今中央線の夜汽車に乗つて居ります。近日また東京へ出掛けますから、その際にはまたお邪魔に上るかも知れません。今雪が降つて居ます。離れ山の麓の我々の小さな家は、今時分凍つてゐるでせうが……」高山は不眠の退屈から、感慨を籠めた筆を運ばせかけたが、ふと自制して、少し詳しい轉居の報告だけにして、暫く滞在する筈の玉市の住居を明かに書き添へて、葉書は車掌に頼んだ。

交友の乏しい彼れに取つては、尾越夫妻の如きは珍らしい知人になつてゐるので、輕井澤の生活を記憶から呼び起すたびに、その夫妻のことを思出さないではゐられな

が。秋風が吹き出して、避暑客は日に／＼歸つて行つて、月見草の咲誇つてゐた高原も尾花の野となつた時分に、周囲の燈火の消えた闇の中に、尾越の家の一點の燈火のみが幽かに光つてゐるのを、彼れは懐しい思ひをして見てゐたのであつた。夫妻の間は睦じさうであつたが、あたり前の夫婦とは思はれないやうなところがあつた。第一、妻君が、派手なつくりをしてゐるのに關はらず、尾越と釣合はぬくらいに歳を取過ぎてゐた。二人とも遊惰な生活をしてゐた。

高山は、尾越の單純な話振りや、遊惰であつても悪氣のなさうな人柄を好んでゐたが、それよりも妻君の色つばい素振りに知らず／＼心を惹かれてゐた。

十月に入るまで踏留つてゐた高山夫婦は、その少し前に歸京することになつた尾越夫妻に誘はれて、告別の散歩を共にした。

「どちらが先きに退却するかと思つてたら、私の方が負けましたね。しかし、あな



たもいゝ加減でお歸りなさい。野中の一軒家は怖いですよ」と、尾越は云つた。

「僕も大分東京が戀しくはなつてゐるんですが、しかし、東京へ行つて見たつて面白いこともなさうですからね」

「私にだつて、東京がいゝ事を持つて待つてゐてくれるのぢやありません。むしろ煩い思ひをしなきやならないでせうが、でも、東京はうまい物が食べられるだけでも有難いですね」

「尾越はこの頃食氣づいて、やれビステキが食べたいの、テンブラが食べたいのと食物の事ばかり云つてゐるので御座いますよ」と、妻君は横から嘴を入れて、「幸抱氣がないつたらひどいですからね。最初のうちは、私こんな淋しいところには十日ともゐられないだらうと思つてゐたのですけれど、住んで見ると、結局安心してゐられると、覺悟をいたしましたの。それに尾越ははじめはこんな涼しい空氣のいゝ

ところはないつて、夢中で喜んでゐたくせに、餘程前からこの土地に厭いてしまつたらしいんです。男の方が女よりは物に厭きやすいんで御座いますかね」

「さあ、どうですかね。……人によつてさまざまでせうが、大體男の方が物事に執着が深いんじゃないでせうか」

物事と云つても、高山は男女間の情事を念頭に置いて、さう云つたのであつた。それについて、尾越も妻君も頻りにめいゝの意見を述べた。四人は山腹の四阿に憩うて、暫く秋晴れの野を見廻した。此處で温かいコーヒーでも飲めたらいと、誰れかが云つた。

その言葉を思出すとともに、高山は、續けさまの喫煙で荒らされた喉を潤ほして、だるい頭を力をつけるために、一杯の温かいコーヒーを飲みたくなつた。

夜明け前に五市に着いた時には、雪が可成り積つてゐた。湘南地方とはちがつた底



冷たい、殺氣を含んだ風が彼れの頬に觸れた。どちら向いても春は萌してゐなかつた。

市を取圍んだ遠近の山嶽の雪晴の景色は美しかつた。高山は市の眞中にある青木家の二階の窓から、富士を中心にした連山が、碧空の下に鮮明に聳えてゐるのを新奇な思ひを寄せて、朝となく晩となく眺めてゐた。雪解道を荒川土手や古城のあたりまで散歩したりしたが、季節がまだ早いので、山奥を差して足を進めることは出来なかつた。

婚禮を前に控へた一家の人々の動靜をも彼れは、新奇な思ひを寄せて、日に夜に眺めてゐた。高山自身の婚禮も、彼れが斡旋した妹の婚禮も、極めて手軽に取運ば

れたのであるし、「從來冠婚葬祭の世間的の儀式に親しくたづさはつたことはなかつたのだから、純日本の傳統的慣例や、この地方の習慣を巨細に渡つて守らうとしてゐる今度の婚禮の手順を見てゐると、事々に興味があつた。外目には結婚する當人同士の事はそつちのけにして、儀式のための儀式をしてゐるやうに見えるのが、奇怪不思議にも思はれた。

「結納の日取りがまだ極まらないのです」と、青木家の老主人は低悟しさうに云つて、いろ／＼と憶測をしてゐた。去年の夏仲人の手を経て話が極ると、間もなく相手の田村家へ此方から親子連れで出掛けて、酒が入つたので、その儀式は土地の風習として、結納の取交し以上に縁談の成立を保證するものであつたが、その後、先方からいろ／＼な口實の下に、興入れの期日を延し／＼するので、青木家では心元なく思はれてゐた。氣拙い思ひをさせられるやうな噂も世間の口から時々傳へられもした。



「良三さんは當世の若い者には珍らしい堅いおとなしい方だし、稼業は繁盛するし、あなたはお仕合せですよ」と、親戚の者に云はれると、

「いや、嫁を娶つてしまふまでは、安心して眠られませんよ。重い荷を背負つてるやうでね」と、老主人はこぼした。

「お嫁さんの選好みに苦勞するくらゐ、親として楽しみな苦勞ぢやありませんか。此方のお嫁さんになら候補者はいくらでもあるのでせうから」

「傍はたで思ふやうにやいかないものでさ」

老主人は、おれの苦勞はおれでなきや分らないのだと、これほどの一家の川大事を、傍の者が軽く見てゐるのを不平に思つてゐた。四五年以來、時々持込まれる縁談を一々根掘り葉掘り調べて、些少の瑕瑾をも嫌つて拒絶して、自分で市中を物色して早くから目星をつけてゐた一人にのみ拘泥してゐた彼れは、自分の胸に描かれ

てゐる良縁に傍から水をかけられるのを好まなかつた。故障が起つたのぢやないかと疑はれるたびに心が萎れた。

當人の良三はすべてを父に任せて冷然と構へてゐた。「お父さんのお好きな××さん」と、浮いた調子で座興に云つて笑ふ者もあつたが、さういふ時にも、老主人は眞面目な顔をして辯じた。

「おれは自分の道樂で勝手に嫁を極めるのぢやない。容色きようしきでも育ちでも、氣風でも、これなら青木家の嫁として、世間へ出して耻かしくない、世帯をまかせて大丈夫だと思へばこそ、お前だちにも相談して、こゝまで話を運んで來たのだ。だからお前だちももつと眞剣になつてくれたきや困るよ。誰れでもいい、當人の氣に入つた者なら誰れでも連れて來いといふやうな手輕にや行かないぢやないか。藝者や女郎を引張つて來られても困るからね。相續者は何事も家のためといふことを第一に考へてゐな



ければならんのだ」

高山も老主人から屢々かういふことを聞かされて、それが世間の親の普通云ひさうなことだとは思ひながら、固定した家といふ者を持つて居ない彼れは、そんなことは身に染みて感ぜられなかつた。

「私は早く世を繼いで、若い時から今までしみく湯治や見物の旅をしたことがありますよ。今度の事の片がついたら、後は若い者にお譲り申して、時候のいゝ時には十日なり二十日なり、緩くり何處かへ行つて見たいと楽しみにして居ります」老人はたびくかう云つたが、ある時良三は、

「何時だつて行けたのぢやありませんか。今までに行けないやうなら、これからだつて駄目ですよ」と苦笑して云放つた。老人は笑つて黙つてゐた。

若い健かな良三は、稼業の暇には、せめて市中の散歩でも存分にしてみたかつた

が、それさへ自由にならなかつた。で、湯に入つて来るのさへ、馬鹿にならない享樂の一つにまつてゐた。自分が二十年來住んで来た町でありながら、この市中が何時も珍らしく彼れの目を惹いてゐた。

「今夜は久振りで活動を見て來たいんですが」と云つても、活動寫眞の見物さへ、快く許されない場合が多かつた。

「若い者はそんなに活動が見たいものかな」と、珈琲店だの活動小屋だのと、餘計な娯樂場の出来るのを、父親は歎息した。

「お父さんの若い時分には、何が楽しみだつたのでせう」良三の言葉には不平が籠つてゐたが、父親は笑つて黙つてゐた。

子供の外出を喜ばない老主人も、自分で終日家の中に蟄居してゐると、頭が鬱陶しくなるので、何かに假托けてはちよつとでも外を歩いて來たがつた。暫く寄寓す



ることになつた高山が、日々の散歩に出掛ける時に、道案内として一緒に出掛けることもあつた。さういふ時には、世事に暗い高山をも、時に取つての相談相手として縁談に關はつた疑問やら意見やらを、隔意なく口に出した。

「祝儀事もこれからの時世では、成べく質素にした方がいゝんでせうな。當人同志の心掛けがよくつて、内輪が圓滿に收まりさへすればいゝので、肝心なことはそれ一つですからね。しかし、先方はなか／＼手が込んでゐて、手輕に濟みさうぢやありませんよ。仲人も財産家で、私のために一はだ脱いで骨を折つてくれてるんですが、のつげに、今度は青木さんお氣張りなすつてと切込んで來る有様で、此間も先方の仕度は大變ですぜといふ觸込なんですよ。……弱つてしまふ」

「それは構はないぢやありませんか、先方は先方、此方は此方だから」  
「それでいゝものでせうか。……私の方は昔からの家風で、家の中も御存じの通り

に昔のまゝで何處にも飾りつ氣がないんですが、先方は一體に派手なやうです。……尤も私の家の生活もあんまり控へ目過ぎるやうですから、これからは若い者次第で、少しは人前のいゝやうに華やかにした方がいゝかもしれませんね」  
『さうでせう。財産の餘裕があるのに、強いて質素に暮すのには及ばないでせう自分の力で得られるだけの樂みは樂んで今日を愉快に暮したいと、當節は誰でもつてるやうですから」

「ぢや、まあ、後々までの家の事なんかはどうでもいゝ、自分のしたいことを勝手

にすればいゝつていふ譯なんですな」  
「さう。……しかし、世の中はどう變つて、金持の財産も何時叩潰されるか分らないつていふ時代ですから、自由に費へる間に費つとくのが利口かも知れませんね。一寸先は闇の世ですからね」



「私どもは無理をしましてまで儲けようといふ慾はなかつたものです。だから、お蔭で世間の信用も續いて來たし、親戚にも何かと云ふと、相談相手にされるつていふ風ですが、この先はどうなりますか」

「お嫁さんが來たら、家風も變つて來るでせう。何處の家でも、女房といふ者は雖然非常に勢力を持つてゐるやうですから」と云つて、高山は一二の例を挙げたりしたが、眞面目に聞かれるのをいゝことにして、年長者に向つて世態人情を解くのが、少し氣耻しくなつたので、「結婚の儀式も儀式だが、一つ新婚旅行をおさせになつちやどうです？ 人間の一生に一番楽しいことらしいですから。それに一度機會を取外したらあとではしようたつて出來ないことなのですから」と、半ば座興に云ふと、「え、それはいゝでせう。結婚當時は家の中がごたつきますから、旅行にでも出てくれれば、家の者の手数が掛からなくつて、結句便利かも知れませんよ」

老主人が家の事、子供の事に、老いの心を碎いてゐるのを感じるにつけて、高山は自分の父親の事を思出した。自分の故郷の家と青木家との氣風の相違をも思比べた。親の側へ置いて親の稼業をそのままに繼がせて、わが子の一舉一動、目顔の晴れ曇りにも、言葉のはしくにも心を配つてゐる一人の父親と、子供の勝手氣儘な行動を大抵は見過して、古い廣い家に獨りで産を守つてゐてあまり苦にも思つてゐない一人の父親との、二つの老いた姿を彼れは心の中に描いて、ちつとそれを見てゐた。……高山は自分の妻を撰ぶに當つても、事後承諾と些少の費用を求むる以外に、父親の頭をも手足をも煩はさなかつた、彼の二三の弟の結婚もさうであつた。一人の妹でさへ自分で夫を撰んだ。

「どちらが子供のために幸福なのだらう？ どちらが親自身に取つても幸福なのであらう？」高山は、若し自分が良三の親のやうな親を有つてゐたなら、自分の生涯



はどう變つてゐたであらうかと、想像をめぐらしたりしたが、それはとに角、一人の子供もない、將來生む望みもない彼れには、親心といふものは些とも分つてゐなかつた。生物學者の説くところから考慮したり、日常見聞してゐるところから推察したりして、親心の概念は心得てゐても、身に染みて生き／＼と感ずることはどうしても出来なかつた。世界の親々の心は、彼れの力では味ひ知ることの出来ない神祕不可思議の何物かであつた。

「おれの親爺は、いくらやりつ放しであつても、大勢の子供を育て、來たのだから、随分苦勞したのであらうが、親心といふ不思議な物を味ひ知つてゐるのだから、おれよりは幸福だ」

彼れは、故郷の家の奥座敷の炬燵に當つて、算盤か帳簿かと睨めつくらしをしてゐるか何かしてゐる今の親爺を想像するにつれて、彼れが幼かつた時分の父親を追想し

た。……彼れが物覚えのいゝのを自慢してゐたらしい父親は、眞夏の休暇に、日本外史や、十八史略の素讀を授けようとしてゐたが、強いて學ばせられる彼れに取つては、それが苦役のやうに感ぜられてゐた。満潮時を見計らつて水遊びに出掛ける近所の仲間から誘ひの聲を掛けられたりする時には、自己流の節をつけて朗々と讀立てゝゐる父親の聲が憎くなつた。で、時々父が教へたがつてゐる時刻を豫感しては、そつと家を出て遊んで來ることがあつた。……あの時分の父親は、今のおれよりも若かつたのだと思つてゐると、自分の身のまはりが淋しいやうに、高山には思はれた。

仕度は略々出来上つたから、結納の日取りも式の日取りもそちらで極めて呉れと、先方から仲人を通じて云つて來たので、此方では俄かに勢ひづいて、曆を取出して言



日の穿鑿をはじめた。九星曆の外に日連宗の曆をも参考にしたのであつたが、二つの曆の所説が一致してゐないので迷はされた。

結納として送るために、京都へ染めにやつた花嫁の式服が着くと、家の者も寄寓者も目を翫てた。式服には孔雀が羽をひろげてゐた。

「成ほどよく染め上げてゐる」と、皆んなが云つた。まだ見ぬ女がこの式服を着けた華美な花嫁姿を高山は想像しながら、「先方のお好みださうですが、孔雀の模様は奇抜なのでせうね」

「孔雀は虚榮の鳥だといふぢやありませんか」老主人はそれを氣にしてゐるやうだつた。

「孔雀は蛇を喰ふさうですよ。孔雀明王の有名な佛畫を見たことがあります、昔は呪ひをかける時に、僧侶がその前で祈つたのださうです」

兩親や花婿の式服も、すでに新調されてゐたのであつたが、まつ子の式服は華美な場所に相應はしいのがなかつた。持合せの物は着る機会のないうちに自から世におくれて見窄らしくなつてゐた。老主婦は頻りにそれを氣にした。先方の親戚は富家ばかりで、誰れとかさんは一萬圓のダイヤの指輪を嵌めてゐるなんて、大袈裟な噂を聞いてゐるのに、さういふ人達の中へ、自分の娘をこんな身窄らしい物を着せて交はらせるのは、どうしても忍びられなかつた。

「これでいゝんですよ、どうせ一度お役目に着るきりなんですもの」と、まつ子は諦めてゐるやうに云つた。

「でも、年寄の私たちでさへ新調してゐるんだもの」

「着物のことなどどうでもいゝの」まつ子は何となく哀れを感じて、「それよりもね、……私は子供はないし、落着くところがないやうな氣がしてならないの。高山に死



なれでもしたら、私の行場所がないんですから、それを思ふと、淋しい野原を一人で歩いてゐるやうな気がすることがよくあるんです」と、何時になくしみくと母親に訴へた。

「だつて、親もまだ生きてゐるのだし姉弟もあるのだから、あなた一人で心細い思ひをしてゐなくてもいいぢやないか」

さう云つた母親の目には涙が浮かんだ。まつ子が何故淋しい野原を歩いてゐるやうに思つてゐるのやら母親にはよく呑込めなかつたが、雨露の凌げるだけの小やかな家でも、まつ子のために建てゝやつて置かなければ、安心してこの世を去ることが出来ないやうな気がして、父親にその話をした。父親は笑つて聞いてゐた。

「お父さんは他所から来るお嬢さんのことばかり心配して、自分の娘のことは考へてくれないから仕様がな」と、母親はこぼしたりした。

皆丸なが忙しかつた。邪魔物の取片付や汚れ物の洗濯や、新しい調度家財の整理などにまつ子も母親を助けて働いてゐた。自分たちが旅で汚した衣類の仕末にも骨が折れた。仲人をはじめ、人の出入りも多かつた。

用事のないのは高山一人であつた。毎日御馳走になつて、市中から近郊へかけて散歩をして、午睡をして、時々、婚禮の準備を傍観してゐた。此處を立退いたら何處に住居を定めるかと考へて、まつ子などに相談することもあつたが、その場合が來たらどうにかならうと、軽く見做してゐた。

東京の知人との手紙の遣取りは殆んど絶えてゐたが、ある目計らずも、尾越の音信に接した。

「拜啓、小生先月末より郷里福島へ歸省いたし、昨夜上京仕候。お手紙の趣きによれば、最早大磯を御退去相成りし由。御訪問致さざりしを残念に存じ候。小生は一身



上の都合により、東京に住みがたく相成り候故、近々家を片付けて郷里へ隠退いたすことに決定いたし居候。他日拜眉の機会も之有候はんが、をりくくの御音信願上候。輕井澤の閑寂なる風色夢の如く思出され候。奥様へもよろしく」

高山はこの手紙を読むと、九段の中坂のほとりにある尾越の今の住居を目に浮べた。小さな家であつたが、二階が一室あるし、日當りがよさうで、借家としては手綺麗に出来てゐた。空家の拂底してゐるこの頃、あのくらゐな家が借りられればいと、ふと思ひついたので、まつ子にさう話した。

「式の日まではまだ大分間があるから、ちよつと東京へ行つて来よう。尾越の後が借りられるかも知れないし、あれがいけなかつたら外を捜して見てもいゝよ」

「こんなゴタ／＼した家にゐたつて詰らないでせうから、明日でも行つて入らつしやう」

「東京で借家がうまく行かなかつたら、思切つて南九州の方へでも行つて見るんだね」

高山は退屈さまして二階で地圖を披いて、未見の土地を空想してゐた。人間や超人の事をいくら考へて見たつて、生れながら持つてゐる自分の智慧はとづくに行詰りになつてゐて、新しい心の世界の開展する望みのないことを熟知して來た彼れは、身邊の事がもつと自由になつたら、未見の土地を巡遊して殘生を送りたいとよく考へてゐた。海外の地圖をも屢々注視してゐた。長崎島原などを経て、薩南の湯の町揖宿に暫く居を定めて見たいと思つたこともあつたし、日向の茶臼ヶ原の孤兒院を訪ねて見たいと思つたこともあつた。その孤兒院には、少年時代の彼れを愛撫して、基督の道を單純平明な言葉で傳へた昔の田舎牧師が老後の生涯を送つてゐる筈なので、高山はお互ひがこの世に生きてゐる間に、一度その牧師に會ひたいと思つてゐた。



「二十何年先生にも御無沙汰をして世の中を渡つて來ましたが、肝心な事はつまり何も分らないで、分らないしまひで私も一生を終りさうです」と云ひたかつた。井でさへ頭髮が薄くつて瘦せさらばいてゐたかの牧師の今の有様はどんなであらうか。顔に似合はない鳩のやうな柔和な目付は、高山の記憶に今も懐しきをもつてハツキリ残つてゐる。…都會から隔絶した原野で薄倅な小兒の教養などに従事してゐるのこそ、人間としての最も尊い生活であつて、現世と天國とをつなぐ梯子はさういふ所にかゝつてゐるのかも知れないが、それでは彼自身かの牧師等の下に隨いて安んじて働き得られるかと考へて見ると、考へるさへ可笑かつた。

（人を殺して心が安じてゐられないのなら、人を助けたつて、わが心は安んじられないのだ。どちらにしたつて同じことだ）

階下へ下りると、仲人が結納取かはしのために來てゐた。二三の親戚も座に加はつ

てゐた。縁喜を祝ふための茂久録の用語も字配りも、人々に頭腦を絞らせて六ヶ敷かつた。いくつかの進物臺に載せられた結納の品々は、翁の面や松に日の出などの模様のある風呂敷をかけられて、仲人の宰領で持出された。同じ家の中も、不斷の夜とは違つて、奥床しく見られた。仲人が目出度く納めて歸つて來ると、祝ひの贈が並べられた。盃をやり取りしながら枝から枝へとうつつて行く世間事も、たえず歡喜の色に照つてゐた。

「良三さまも荷が重くなりなすつたから、これからまた一奮發なさるんですね」と仲人が云ふと、

「これで身が極ると、働くにも張合がつかますよ」と、老主人が應じた。



高山は翌朝東京へ行つた。

飯田町の宿屋に着いて、茶を一杯飲むと直ぐに外へ出た。田舎から出て来るたびに、こんな空気の濁つた騒々しい所で、よく人は生きてゐられることだと感じるのであるが、それとともに、自分の故郷へ歸つたやうな氣持もした。女の美しさも彼の目を惹いた。筋肉の引締つた綺麗な顔した、天眞の生氣が身體に漲つてゐる大磯などの女よりも、虚弱な肉體を脂粉で色取つてゐる都會の女の方が美しく見えるのを如何ともしがたかつた。

神保町あたりまで行つて、醫藥など二三の買物をした後で、中坂の尾越の家を訪ねるつもりで、九段下まで來ると、數人の若い男女が電信柱へ大きな紙を貼りつけてゐた、立留つて見ると、××會主催の婦人問題講演會の廣告であつた。講演者には高山の知人もあつた。知名な社會主義者もまじつてゐた。

貼終つたところへ、巡査が急ぎ足でやつて來た。

「これは届けてあるのかね」と訊ねた。

「いえ、別に届けてはゐないです」と、髪を長く延した袴を着けた學生らしい男が答へた。

「ぢや、いけない。剃いで下さい」巡査は凜として迫つた。

「剃がなくともいゝと思ひます」

「いけない、剃ぎたまへ」

二人は顔を紅らめて二三の押問答をしてゐたが、やがて巡査は警察署までの同行を命じた。先つきから後の方に立つてゐた、髪を七分三分に分けて束ねてゐる仲間  
の女は、微笑しながら、

「警察署へ行くんだつて。行け〜」と、小聲で云つて隨いて行つた。



街上のさういふ光景は、高山には珍らしかつたので面白かつた。

尾越は家にゐたが、家を片付けてゐる様子は見えなかつた。

「お移りになるのなら、後を譲つて頂きたいと思つてゐるのですが」と、高山は玄關へ上りながら云ふと、

「實は故郷へ引込む日取りは、まだハツキリ極つてゐないのでですよ」と、尾越は面羞さうに云つた。

二階へ通されてから、高山は成べく東京へ住みたくなつた自分の心持を話して、相手の郷里隠退の理由をも訊ねたが屋越は暫くその答へに躊躇してゐた。

「どうも思はしい職業が見つかりませんから、一二年川舎で親爺の手傳ひをしようかなんて思つてゐるんですが、私の故郷はちよつと歸つて見てもいゝ所ぢやありませんからね。……まだ當分は此方で遊んでゐたつて饑え死する心配はないのですが、

懐手をして暮すのは社會に對して濟まないやうに思はれますよ」

「しかしあせらないで、此方でゆつくり方針を立てたらいゝぢやありませんか。資産家の御息が田舎でブラ／＼してゐるのは、尙更傍の者の目について遊惰な人間と思はれるでせう」

「いや、今度歸つたら、一生懸命に汗を出して働くつもりなのです。遊んで暮すのも傍で思ふほどに氣樂ぢやありませんからね」

尾越はふと興奮した口を利いたかと思ふと、相手の言葉も耳に入らぬやうな風で、落着かない目をしてゐた。

これには何か譯があるのであらうと、高山は感付いたので、長座を潰感して、間もなく暇を告げた。妻君の顔を見ないのが物足らなかつたが、この夫婦の間にか何か變つたことでも出来てゐるのではないかと危まれたので、妻君のことは訊かなかつ



た。

去年の末に訪ねて来た時には、夫婦は他の中年増と三人で晝間からランプを取つてゐた。軽井澤で退屈のあまり、はじめてこんな物を手にしたのだと、妻君は言譯をしてゐた。

「大晦日を目の前に控へてゐるのに、お宅は天下泰平ですね」と、高山は冷かして、「僕などは勝負事には興味がありませんよ。どちらが勝つても負けてもいゝつて思つてゐるから」と、悟つてゐるやうに云ふと、

「でも、詰らない遊び事にも負けるつてことはいやなものですわ。損得の関係がなくつても、負けるつてことは本當にいやなものだと、私思つてますの。」

「お前が今日は負けてばかりゐるからだらう」と尾越が横から言葉を挟んだ。

「あゝなことを。まだはじめたばかりぢやありませんか。先の勝は糞勝ですよ。昨

夕だつて御覽なさいな。あなたが泣顔して焼芋買ひにいらつしやつたくせに」

「買つて来たのは僕だつたけど、食べたのは誰れだつたらう」

「私かも知れないわね。勝つた方が御馳走になるのは當り前ですもの」妻君は無邪氣にさう云つたが、ふと眞面目な顔を高山の方へ向けて、「いゝ歳をして馬鹿なことを云つてるとお思ひになるでせう。……私どもも遊び次手に今年一杯は怠けて暮しても、年が明けたら、心を入替えて一働きしようと思つてゐますのです。尾越は氣に入つた職業がなければいなくて、語學の稽古にでも行つたらいいだらうつて、私勤めてゐるのですけれど、相變ずの無性者で仕様が御座いませんの」

「だけど尾越君は語學は一通り修業済みなんでせう。軽井澤で外國人と何か話してゐたぢやありませんか。僕などは日常の挨拶も英語では云へないんですよ」

「毛唐と話したつて詰りませんね」尾越は氣取つた口調でさう云つて、「私の従弟は



横濱のS N商會へ出て、何時も外人を相手にしてゐるのですが、その従弟は學生時代から語學が特別によく出来て英語の外に佛蘭語も相當に話せるんです。此間うち四五日横濱へ遊びに行つてた間に、家内は従弟の話振りを聞いて非常に感心して、それから、私を鞭撻しだしたのですが、語學ばかりが學問ぢやありませんからね」「學問のことはどうか、私にはよく分りませんが、英作さん(従弟)は働き者ぢやありませんか」と、妻君の言葉には棘を帯びてゐた。

が、高山の手前、話は外へ轉じた。妻君は部屋を出て客あしらひの準備に取掛つた。高山は尾越から芝居や寄席や活動寫眞などの事を聞かされたが、それ等についての彼れの批評や説明はすべて平凡であつた。

「暇だから、見に行つてゐるやうなもの、大分飽いて來ましたよ。それで従弟のゐる商館へ勤めようかと思つて、略々話がついてゐたんですが詰らないことから中止

になつて惜しいことをしました。私は俸給の多少に關はらず働いて見たくなつてゐるんですけど、運が悪くつて私の決心の鼻先がいつも挫かれるんです。しかし、來年は京橋のある貿易商の會社へ出られるやうに昨今話がつきかゝつてゐるんです」と、尾越はしみじみと云つた。

妻君は再び入つて來た時には、服裝を變へて顔をも飾つてゐた。

高山は二人の話相手として引留められるのを振切つて、夕餐の饗應は受けないうで暇を告げたが、同じ夫妻だけの生活であつても、尾越の家には艶があつて、彼れの家はやうに、落寞としてゐないやうに思はれた。

「しかし、夫婦水入らずの生活も、はたの者の云ふほどに氣樂なものぢやないからな」と、彼れは簡単な批評を下した。

毎日、朝餐を済ますと、直ぐに飯田町の宿を出て、就眠時刻まで何處かで遊ば



らすのを、彼れは例としてゐた。故郷へ歸つて來たやうな氣持と、獨りで旅へ出てゐるやうな氣持とを一しよに持つて、都會の人臭い臭ひに身體を浸して彼方此方を歩いた。一度は講釋場の晝席へ行つて、日本人の心にまだこびりついてゐる古風な犠牲の殘影を見て、彼れの如きものゝ心にさへ、日本の國土に育つて來たゝめ、講釋の英雄に感動する分子が微かなながらもあつた。不思議に思つたりした。知人に會ふたびに訊ねても、空家は絶対になさゝうなので、結婚式にはまだ間があつたが、兎に角五市へ後戻りすることにした。

ところが、出立の前夜に、尾越から電話が掛つて來た。一度お訊ねしたいのだが、時刻は何時頃がよいのだらうと云ふのであつた。

「今からお出でになつても構ひません。……ぢや、待つてゐます」と、高山は返事をした。

女中に客の案内を頼んで置いて、風呂に入つて來ると、尾越はすでに火鉢の側に坐つて、珍らしくも葉巻を吸つてゐた。

「なか／＼寒いですね」高山は襦袢のまゝ火鉢の側に坐つて、「先日のお話のヴェリタスといふ活動寫眞を見ましたよ。活動のうちでは見應へのある方なのでせうね。獨逸物だけあつて神祕的な理屈が映畫のうちに染徹つてゐるやうなところがありませんね。三たび現はれ三たび消え、眞理は最後の勝利を占むと云つて、艱難を押切つて眞實を守れ、一時の情に負けて嘘を吐くなと云ふ全體の趣向は、近代劇や小説の中にはありさうなことで、いかにも西洋人の好きさうな理屈ですね」

「理窟に深みがあるし、指環が壁の中から出たり、漁夫の網にかゝつたりして、指環で筋が運ばれるのも面白いぢやありませんか。西洋人は思付がいゝんですね。

「そりや日本の講談なんかの趣向よりは巧い。……だけどあなた方はあんな活動や、



イブセンの社會劇などを見て、眞實さへ云へば安心してゐられる氣になるんでせうか。……あの活動だつて、本當は、眞理が最後の勝利を占めたのぢやない、作者が眞理といふ世界の人氣者を持つて來て、お座興に勝たせるやうにしたのですね。……嘘と眞實だつて眞剣に取組ませたら、どちらが勝つか分つたものぢやない」

「だけど、本で讀んでも、興業物で見ても、眞實が負けたでお仕舞ひになると、い氣持はしないですからね。世の中の實際の事件についてもさういふ氣持がしますよ。あなたはさう思ひませんか」

「それはさうです……」

高山は、それから先きは、自分の智慧の行詰りで、考へたつて話したつて、果しがないので、さういふ茫漠たる疑ひの世界へ、尾越と一緒に進んで行く氣になれなかつた。

「空家は見つかりませんが、僕は明日あたりK市へ返らうかと思つてゐるんです。親類の婚禮に出席しなければなりませんから。……田舎の結婚式は舊弊でいやに仰々しいがあなたのお國の方だつてさうでせうね」

「私は田舎の結婚式にしみ／＼出たことはないのですよ。姉の結婚の時には随分大袈裟だつたやうですが、私は東京にゐて、身體の加減も少し悪い時だつたから出席しなかつたのです」

「あなたの御結婚の時には、此方で式をお舉げになつたのですか」と、高山は何の氣なしに訊ねたが、すると、尾越は苦しさうな顔をして、

「まあさうです」と、勢ひのない聲で答へた。そして、何か見てゐるやうに、上目を空間に据えてゐたが、やがて、

「私は當分あの家で獨り住ひをすることにしました」と云つて、その譯を高山が訊



選すまでもなく、

「ワイフは私が福島へ歸つてゐる間に無断で家出をして、行先を私に知らせないやうにしてゐたのです。いくら居所を晦ましたつて、略々見當はついてゐたのですが、出て行つたものを追掛ける氣にはなれませんから、私は打やつとくつもりにしたのです。今度故郷へ歸るにちや、ワイフの事が問題になつてゐたのですが、——實はまだ正式に籍に入つてゐなかつたので——當人は私の兩親の許しを得る望みはないと堅く信じてゐたやうでした。それが家出の原因と云へば云へますので、遺書にもその點に重きを置いてゐるのですが、本當はさうぢやないものでせう。入籍するしないは我々の考へぢや第二第三の問題なのですからね。……一體私の方でも別れて、當分一人でゐた方が、自分のためにいゝんぢやないかと思つたこともたびくあつたのでした。世間ぢや妻を娶ると生活に張合ひが出來て、仕事にも身が入ると

云つてゐますが、私は例外な人間なのか、ワイフと一緒に住んでからは、生活の進路が止まつてしまつたやうなのです。それで、獨りでゐたら、何か相當な職業が得られて人並に働けるだらうと思はれてならなかつたのでした。京橋の會社の口も、私が獨身だつたら、俸給は薄くつても取逃さないで勤めてゐたのでせうが、ワイフがゐたために此方から駄目にしたのでした。故郷ぢや、はじめのうちは苦情を云つてゐましたが、この頃は黙許の形で私たちが定職でも出來て眞面目に暮してゐたなら、早晩籍も入れて呉れるのでせうが、兩親に會つてその話をした時に、私の方でどうも熱心に頼む氣になれなかつたのです。當分アヤフヤにしといつてもいゝつていふ氣で、ワイフに對する言譯を考へながら歸つて來たのですが、ワイフの奴、見透してゐるやうなのだから遺書を見た時にはちよつと驚きましたよ。だけど、私の心ぢや、二三時間も立たぬうちに今後の方針が定つてしまつたから大丈夫だつたのです」



妻君が外に男をこしらへたのでもなければ、退屈しましに隠れんぼでもやつてるのだらうと思ひながら、高山はお座なりの受應へをして聞いてみた。

「ワイフは、年末にあなたがゐらつしやつた時にトランプの仲間になつてゐた女か、あるひはワイフの弟の家に多分隠れてるか、さうでなくつても、この二人は居所を知つてゐるに極つてると思つてゐましたが、私はわざとこの二人の所へは寄りつかないで、端書で訊合はすことさへ控へてゐたのです。無断で出て行つた女を追驅けると思はれるのはいやですからね。……ところが、高山さん、聞いて下さい。妙なことがあるんですよ。あなたが年末にお會ひになつたあの女が——石本さつと云つてワイフとは子供の時から知合だつてことですが——あれが一昨日の午過ぎに、顔色を變へて不意に私のところへやつて来て、奥様は本當にお宅にゐらつしやらないのですかと訊ねるのです。白ばくれてゐるんだらうと思つて、

あなたは家の奴のゐないことを誰れにお聞きになりました？ と、私は荒つぽく訊返しました。

それでああなたは奥様の今ゐらつしゆる所を御存じなのですか。

知つてる筈もないし、強いて知りたいと思つてもゐません。

御存知ないんですつて？ よくそれで平氣でゐらつしやるのね。

あの女は呆れたやうに云つて、それから譯を話したのですが、ワイフは使に手紙を持たせてあの女の所へやつて、ある事情でかういふ所へ来て、今九死一生の場合なのだから、××圓くらゐの金を工面して届けるやうにしてくれ、着換えの衣服も何でもいゝから貸してくれつて頼んで来たと云ふのでした。九死一生と云つて何事が起つたのだらうと、私も吃驚しましたが、さう聞くと打遣つて置けませんから、あの女と訊し、必要な金と着物とを持つて、一緒に出掛けたのです、氣はあせ



つても大崎まで行くのだから途中が随分手間取りました。大崎の家にワイフの掛り合ひがあることは、これまで聞いたことがないので、電車の中で二人しているくりに考へて見たのですが、新宿で乗換えを持つてる間に、あの女が不意に思ひついたやうに、これは自分だけで先きへ行つて様子を見た方がいゝと思はれるから、あなたは大崎の停車場か何處かで待つてゐてくれと、かう云ひだしたのです。九一一生といふ場合に安閑と待つてられる筈がないので、私は飽くまでも反対して一しよに行くと言張つたのですが。

おくめさんは出抜けにあなたに來られちや、面目のない思ひをするかも知れませんよ。御主人のお留守に家を出たことを、今は良心が咎めてるでせうから、出抜けにあなたをお連れして脅かしたら、却つて穩かに事が濟まないだらうと、心配でなりません。ですから、私を信用なすつてお任せ下さいましな。おくめさんのためにも

あなたのおためにも、決して悪いやうにはいたしませんと、あの女は、どうしても私を連れて行くまいとするのです。ワイフに後目うしろめたいことでもあるのなら、尙更早くその家へ行つて見なければ承知出来ない譯なのですが、

ぢや、直ぐに私があなたを迎へに來るか、使を密越すかするから、十分か五分でも待つてゐてくれつて、あの女はいかにも當惑したやうな顔をして云つて、先方の家の名も番地もハッキリ教へてくれましたので、私も讓歩して、停車場で少しの間待つてゐることにしたのです。

ところが、十分立つても二十分立つてもあの女からの音信がない。三十分を過ぎると、私はもうぢつとしてゐられなくなつて、慌てゝその家を訪ねて行きました。番地が解りにかつたので、大分手間取りましたが、家のあることは確かにあつたのです。宿屋でもなし料理屋でもなし、新築の普通の家でしたが、ひっそり閑とし



て、人の聲は聞えないのです。入つて聲を掛けると、下女だか主婦だかハッキリしないやうな五十がらみの女が出て来ました。そして、私がかういふ女が今訪ねて来る筈だから、その人に通じてくれと頼むと、さういふ方は先つき入らしたけれど、お訪ねになる方が此家にゐらつしやらないので、家が間違つたのかも知れないから外を捜して見ると仰有つてゐましたと、親切に教へてくれました。

私は仕様事なしにまゝ停車場へ引返して、暫く待つてゐましたが、果てしがないので、三番町のあの女の家へ急いで行つて見たのですが、無論家へは歸つてゐませんでした。置手紙をして一先づ自分の家へ歸りましたが、どうも腑に落ちないので、悄氣てしまいました。があの女が詐偽をした譯ではあるまいが、一生にはじめて出くわした不思議な事なのですからね。私は手を組んで一心に考へて見ました」

尾越はこゝでちよつと話を切つて茶を飲んだ。話してゐるうちにも、胸に幡まり

のないやうな明るい顔をしてゐるので、高山は氣持よく聞くことが出来た。何よりも妻君の素性を詳しく聞きたかつたのであつたが、露骨にそれを訊ねるのは氣おくれがされたので、

「その石本何とかいふ女の人は、どういふ素性の人なのです？」と訊ねると、

「亭主は質屋の通ひ番頭ださうですが大した収入はなさうです。女の方は私のワイフなんかとはちがつて口數の少い落着いた女ですが、ワイフは誰れよりも懇意にしてゐくせに、あんまりよく云つてはゐないのです。弄花はなが好きで、そのために方々へ不義理なことをしてゐるつて云つたこともありました。……今度の事もさういふ勝負事に關係してあの女おんなが、私から金を引出すために企んだのぢやないか、事によつたら、私の留守中にワイフまでも勝負事の仲間に捲込まれてるのぢやないかと、私も疑つて見ました。晩になつてあの女の家を訪ねて見ると、まだ歸つてゐない。い



よく私を騙したのにちがひないと思つて、復讐の手段を考へてゐたのですが、すると、昨日の夕方になつて、奥様の居所をようやく捜當てたから御安心なさい。それについてお話ししたいことがあるから私の家へ来てくれといふあの女の手紙が速達で来たのです。私は直ぐに仕度をして出掛けましたが、此處でいゝ氣になつて訪ねて行つたら、私はまた元の通りの生活を続けなければならんことになるだらうと、一生の別れ目のやうな氣がしましたから、道を變へて、他の方へ行つちやつたのです。停車場で待呆けを喰はされたかほりに、私は他所へ行つて行衛を晦ましてゐるんです。先つきもある友人にこの話をする、今時分妻君は君の家へ歸つて待つてゐるだらうつて、笑ひ事にするのですが、私は思切つて笑顔で歸つて行く氣にやなれないんです。…私は忍耐力のない人間なのでせうが、自分のワイフに、競馬馬扱ひされて、矢鱈に競走さゝれるやうにされちや溜りませんからね。いくら勝負事が好きだ

からつて、女つて者は自分の夫までも勝負の道具に使ひたいものですかね」

「あなたの奥さんはどうか知りませんが、當世の女はみな負けん氣になつたんですね。今に我々は女のお差圖を受けて生きて行くやうになるんでせう」

高山は、世間の男女關係の常例から推して、尾越は今夜にでも妻君と妥協するだらうと堅く信じてゐて、彼れの強がつてゐる一時の決心などには殆んど價値を置かなかつたが、妻君の家出や石本の企らみについては、尾越の打明話以外の隠れた真相を知りたかつた。

翌日、高山は前觸れはしないで、K市の青木家へ歸つて行つた。結婚式まではまだ數日の餘裕があつたが、家の人たちは寸暇もないやうに忙しさうであつた。



「東京では面白いことがありましたか」と、老主人に訊かれると、

「東京の宿屋へ泊ると、夜眠れなくつて困ります」と、高山は答へた。

「商人でも東京の人はやり口が烈しいですね。私なぞもたまたまに東京へ行つて見ると、働きがついていゝやうです。しかし、この頃は店員がみな東京へ出たがるので、油断がなりませんよ。先きへ行つてゐる者が、手紙を寄越して唆かしたり、たまたま歸つて來ると、洒落れた服装なまなんぞして見せびらかしに來るんだから仕方が悪い。東京へ行つたからつて、取つた給金は右から左へ消えて行くだけで、金を残す者は、十人に一人もないのですが、若い者はみんな腹の中がうはついてゐるから、ちよつとしたうまい口にも直ぐに乗せられてしまふのですな」

「他所の子息の使ひにくいのは當り前でせう」

高山は人を使つて仕事をした經驗は殆んど無かつたので、空々しい返事をした。

「以前は十年の年季に五年のお禮奉公をするやうな者もあつて、店員が落着いて働いてくれましたが、これからはやりにくくなりますよ、商賣を止めて小い家で内輪だけの生活をすりや、氣骨が折れなくて至極安穩に日が送れる譯ですが、何もしないで遊んで暮すといふのも、若い者のためによくなくてせうかな」

「さあ。……何もしないで生きてゐるのも案外苦しいかも知れませんが、どつちにしてもいゝ事ばかりはないとすると、働けるだけ働いた方がいゝんでせうね」

高山は自分の身についてもふとさう思つた。自分が長い年月やつて來た仕事は、たとへ無意味の事であつたにしろ、手を拱いて茫然として生きてゐるよりは、働き得るかぎりには勢一杯働いた方が、まだしもましなのだと思つた。さう思ひついた時の彼れの氣持は、老主人の氣持とさして相違してゐなかつた。家財を護るべき男子を持つてゐる老主人も、子供の無い彼も所有慾や世間慾に支配されて、いのち生命



を生きて行かうとするのに差別はなかつた。彼等の脳裡に差してゐる光や影は同じやうな色をして同じやうに動いてゐた。相手の話すことが互ひの耳によく順つた。今日までに店を仕上げた苦心談や今日までに社會的地位を得た苦心談が、二人の口から出て、炬燵の側の一夕の話が榮えた。老主婦の見立てたお茶菓子が持込まれた。側で縫物をしてゐるまつ子も、世の家庭團樂の悅樂をこの晩にこそ感じてゐた、彼女の式服も間に合つてゐた。

まつ子は一日、良三や店員の助を借りて、預け物の整理をしたが、瀬戸物の食器が壊れてゐるのを見たり、桐の火鉢が紛失してゐるのに氣がついたりすると、住所不定の生活に氣を腐らせた。何時でも容易に運び出されるやうに荷造りをして土蔵の一隅へ積重ねてから、土蔵の人口で埃を拂ひながら、良三と肩を並べて一休みした。狭い空地に置かれた石燈籠の側には、春らしい光が笑つてゐるやうに搖いでゐた。

「もう直きに櫻が咲くんだわね」まつ子は歸つてからも見たことのなかつた故郷の澄んだ青空を仰いで、「あなたは今どんな氣持がしてゐて？」

「別に變つたこともないさ」

「だつて、あなたの一生の大切な時ぢやないの」

まつ子は揶揄つて見たい氣がしたが、十年前の自分の結婚前後の事を考へると、弟を揶揄ふ餘裕のないやうに、ある感じが胸に喰入つた。夫との關係や夫の身内との關係など、自分の十年の間に經驗させられて來たことが、棘をもつて一時に彼女の神經に觸つた。そして、男女の別はあつても、良三も今に知らないではゐられまいと、思はれた。

「お父さんはお嫁さんさへ來れば、家の中がいゝ事づくめになるやうに云つてゐる



けれど、あなたとつてこれから、痛い思ひをすることもあるわよ」  
「そりや、何時までも獨身でゐる方が氣樂だらうね」良三は屋根の端で羽を光らせてゐる。鳥の輕快な運動に目を注いだ。

「あなたは責任が重いんだから、獨身でゐられるものかね。お父さんは家といふことばかり考へてるから、どの子供よりも相續者のあなたを重んじてるのだよ」

「家を大切にするのはいゝが、少しでも新奇なことをすると、危かしがつて御神縁が悪いんだ。去年の暮れにも、×町の長家の井戸が壊れたから、この機會に水道を引いたら、借家人も喜ぶし、新奇に井戸を掘るよりや經費もすつと廉くて上ると云つただけで、昔から有つた井戸を潰すのは縁起が悪いと云つてお父さんは聞かないんだ。それで手敷を掛けて掘直すと、いゝ水が溢れるほどに湧き出したものだから、お父さんいよく御自慢なのさ……萬事がさういふ風なのでね」

「しかし、商賣の方はいぢけてゐないで、勢一杯にやつて御覽よ。自分が見込みをつけてはじめたことが失敗したつて、それは諦めがつくぢやないの」

「僕の家は不景氣の打撃は受けないからいゝやうなものゝ、商賣も傍で云ふほどにや儲らないものだよ。それに何だのかだのと出錢が多くつてね」

「さうだらうね。大所には大きな風が吹くつて云ふから」まつ子は戲談のやうに笑ひくく云つたが、「でも、あなたは道樂をしないからいゝさ。今度の事には随分無駄なお錢おかしがかゝつてゐるやうだけれど、道樂をして使ふ人のことを思へば何でもないからね」

まつ子自身の昔は云ふまでもないのだが、良三の結婚までの身體も純潔に保たれてゐるのを、彼女は結構な事として考へた。……若い時は慌だしく過ぎてしまふ。

良三も二十五歳の今までをこの鬱陶しい家の中で過してしまつた。……何が結構だ



か幸福だか分らないやうにも思はれた。

「あなたは丈夫だからいゝね。私はこればかり身体を使つても、足腰が挫けるやうに疲れるのよ。昔はさうぢやなかつたのだけど、一度悪くなつた身体はどうしても元のやうにはならないものよ」

良三などに話したつて甲斐がないと思ひながら、ふと起きて来た體内の疼みを口に洩らした。それにつれて、自分と同年輩の近所の知人が病んでゐるといふ噂を思出して、病氣の経過を良三に訊ねてゐると、女のやうな聲をした男の唄が、昇越しに聞えて来た。「春はく」。春は花咲く向島。オール持つ手に花が散る。ヤートセイ

「どうしました？ 荷物は片付きましたか」と、老主婦がニコ／＼して寄つて来た。「おちかさんの病氣はどうしても癒らないんですかねえ」と、まつ子が訊くと、

「寝てばかりゐるんだつて。暮々しく癒り目が見えないから、病人も痢が起るんだらうよ。若い人の長患ひは本當に氣の毒だよ」

「若い時を患つて暮らすのは因果ですよ。病氣なら烈しくつても、癒るか癒らないか、早く極りがついた方がいゝのよ。鵬殺しにされるのはいやですからね」

母子が話をはじめた間に、良三は二人の間を通抜けて店の方へ行つた。

春雨が音のせぬほどに降つた晩、花嫁持參の品々が大勢の人夫によつて運込まれた。通りが／＼にふと立留つて傘を傾げて此方を見ては行過ぎる男女の様子が、高山には面白く見られた。路傍に差してゐる潤んだ光の中に現はれて来る一人々々がそれ／＼の目付を店の内へ注いでは、やがて闇の中へ消えた。



昔ながらの座敷の中に、簞笥や夜具戸棚や、いろ／＼な調度が坐るところつちたいほどに收められて、新らしい光を放つた。人夫をねぎらつてから、内輪の祝ひの酒宴が別席で開かれたが、一點の批難も打ちどころのない行届いたま度について、みんなの話が賑つた。價額の評價もされた。幾掉のかういふ簞笥の中へ收められ、ゐる衣類の美を盡してゐることも豫想されたが、かういふ品物によつて花嫁其者のねうちも敷居の重みを加へたやうであつた。これちや花嫁さんも家へ来て、家の中の汚らしいのに驚くかも知れないと、老主人は喜びのうちにも氣遣つたりした。

三十近い下女のおきくは、薄暗い臺所で店員の食事拵へなど、自分の受持の仕事にいそしみながらも、婚禮の話にはかねて耳を留めてゐたが、荷物が来てからは、彼女の神経も緊張した。簞笥や調度を覗き見して、驚いたり、平生は酒の氣のないこの家に、毎日贅澤な料理の匂ひや酒の匂ひのするのに心を咬かされたりした。家

の中に自然に漂つてゐる華やかな空氣は、臺所の片隅に蹲つてゐる彼女をも包むことを忘れなかつたのであつたが、彼女は店員よりも誰れよりも烈しい刺戟を受けてゐた。結婚といふものが、衣類や調度やさま／＼な儀式に装はれないで、「結婚その者」として、あるがまゝの正體を彼女の目前に鮮かに浮べてゐた。

「私だつて相手さへありや、まだ子供の一人や二人は生んで見せるよ」と、おきくは先日笑顔をして云つてゐたが、彼女は一度子供を生んだこともあるし、戸籍面でも認められてゐる夫と名のつく男をも存つてゐたのであつた。その男はノラクラして當り前の稼ぎをしない上に兇暴なところがあつたので、彼女自身もついに愛想を盡かして、屢々兩親の注意をも受けた揚句に、人を間に立て、離別の話をつけたのであつた。別れてからは、農事をもすれば女中奉公をもした。何處でも働き者として通つて来た。夫と一緒にゐた間は、絶えず生活に苦しんでゐたが、獨り者にな



つてからは、立派に自分の口を糊した上に、両親へも貢ぐことが出来た。「あの男にはもう會つちやならんぞ」と両親に云はれるたびに「會ふものか恐ろしい」と答へてゐた。

口ばかりではなくつて、堅く決心して獨り稼ぎの氣樂さを喜んでゐたのだが、日に月に以前の苦しかつた記憶が薄らぐにつれて、懐かしい記憶のみが心の中に淀んで來た。ある時ある所で、ある店の若い人に戯談口を利いてゐると、戯に肩を叩かれたことがあつたが、それが何とも云へない、氣持がした。もつと強くどやしてくれ、ばい、と思はれた。別れた夫にどやされた時には、もつと強い手答へがした。その夫にをり／＼打たれた時の、全身に響渡つた疼みが、今は怨み憎みの種になるどころか、戀しい懐しい思出になつてしまつた。

で、年末のある夜、風呂の歸へりに、別れた夫に久振りで行會つた時にも、さし

て恐れなかつた。卒氣ない素振りをされないで、取合つて貰へるのが悦しかつた。そして、誘はれるまゝに木賃宿で一泊した。その後、外出の機會をつくつては二三次度構曳した。

おきくは周圍に渦巻いてゐる婚禮の潮に自分も浸されて、別れた夫の面影を頻りに思出してゐた。お金が残つても人の家に奉公して人の家で寢起をしてゐるよりは、貧しい思ひをしても自分の家にあの夫と一しよに住んでゐた方がはるかに仕合であるやうに思はれた。貧乏するといつても饑えるのでもないし凍えるのでもないものだもの、……

此方の思ひが先方へも通つたのか、別れた夫はふと店先へ姿を見せた。しかもそれが、結婚式の當日のことであつた。蓬頭垢面の男が、塵一つ留めてゐない土間へ泥下駄で入つて來るのを見ると、家の者は眉を擧めた。目出たい席へ不吉の影が差



したやうであつた。

「おきくに會はせて下され。是非話さねばならん大事な用事があるんです」と、その男は頻りに首を垂れた。

「今日は忙しんだから困る」と、家の者は一度は断はつたが、その男は動かなくつた。若し無理な拒絶をして、こんな男を怒らせて怨みを買つたら、今日の大事な日に傷のつくやうな不愉快なことが起らないとも限らないと、氣遣はれたので、とに角おきくに云つてその意志にまかせた。

おきくはニヤ／＼笑ひながら、平然としてその男を自分の部屋へ連れて行つた。

男は「お宅ぢや今夜目出たい式があるんだつてな。おら、此間の晩お嫁さんの荷が入るのを、電信柱の蔭に隠れて見とつた。豪勢なもんだな」と云つて、部屋の中に手足を伸した。

「私も忙しんだよ」

「だからセツセと働くがいゝや、おらあお前の邪魔をしに來たんぢやねえ。疲れたから一休みさせて貰ひさへすればいゝんだ」

男はおきくが掛けてくれた夜具にくるまつて、いゝ氣持で眠りに就いた。おきくは臺所へ出てセツセと働いたが、今までよりも仕事に張合がついて來た。そして、酒の残りや肴の残りを、寝てゐる男の枕許へ運んで行つた。家の者は混雜に取紛れて、その男のことは忘れてゐた。

女たちが化粧や着衣に手間取つてゐる間に、寄集つた親戚の男同士は、久振りで顔を合せたものもあるので、お互ひの近状について賑かに話合つた。稼業がらで、經濟界の景氣不景氣や、金儲けのことが、何よりも興味のある問題になつてゐた。醫師の一人も、最近百日咳の注射薬の新發見をしたので、××製薬會社から廣く賣



出すことにしたと云つて、その効果や莫大な年收の豫想の説明をした。

「この土地には實業家が多いやうですが、學問や新發明をして有名になつた人はあまりないやうですね」と、高山が訊くと、

「この縣内には本當の實業家も少いんです。多いのは相場師と賭博者だけです」と醫師は答へた。

前觸れによつて一同は店先へ列んで、兩親や親戚に護られて到着した花嫁を出迎へた。……下女部屋で残肴冷酒に舌鼓を打つて、いゝ氣持で寢をべつてゐたかの男は、どよめいた家の様子に耳を留めると、あたりが暗くなつて人もゐないのを幸に、障子の隙間から、顔を出して、狭長い土間の向うを見やつた。明るい光の中を立派に着装つた男女が、ごたくと入つて來てゐる。おきくも小奇麗なのに着替えて、片隅に立つて謹ましやかに出迎へてゐる。

「金持のすることはちがつたものだ。だけど、詰りは同じこつた」と呟いて、彼れはまたも安樂なごろ寢をした。

偕老同穴の堅めの盃や、兄弟親戚の盃事や、兩家の親戚引合せの式が型の如く運んだ後、自働車で新婚披露の式場へ出掛けた時には、夜が可成り更けてゐた。

おきくは皆んなが出て行つたあとで、下女部屋へ入つて來た。

「お嫁さんは奇麗だつたらうな」と訊かれると、

「お前にも見せたかつたよ。だけど、花嫁さんは何處で見ても俯向いてゐるから變でねえかの」

「お前だつてもおらと盃事した時にや俯向いとつたでねえか」

「空云ふでねえよ。」おきくは無邪氣な笑ひを洩して、「盃事といへば、今夜は何處かの女中さんが二人も三々九度のお酌をしに來てゐたよ」



「おらは手酌で頂戴した。……もうけへらさなるめいな。お蔭様で御馳走になつた」

披露の宴が首尾よく終つた時には、十二時が過ぎてゐた。高山夫妻は、まつ子の姉婿の注意でその家に一泊することになつた。離れの新しい座敷で絹夜具に包まれた。が、高山は夜更けての飲食のために胃腸を悩まされ、場馴れない窮屈な席で行儀を守つてゐたために神経を疲らされてゐたので、快く眠られなかつた。まつ子も饗宴の席で絶え間なく受けてゐたいろ／＼な印象や、青木家の今後の變化に關する想像などによつて刺戟されて、屢々熟睡を妨げられた。

彼岸は過ぎてゐたが山國の夜はまだ寒かつた。高山は屢々夜着を掻合せては腹匈ひになつて煙草を吸つた。氣を紛らす書物は傍にないのだから、雑念の虜になつて

ゐるより外はなかつた。平生稍々ともすると眠づらい夜を送つてゐる彼れには、今更珍らしいことではないが、深夜に連続して湧上る雑念ほど心を疲らせて、しかも何の役にも立たないものはなかつた。……何時どんな酷い病氣に罹るか、どんな酷い災難に會ふかして、苦しい死様をするか分らないのだから、どうせ免れがたい死を偶然の運に任せきりにしてゐないで、自分の意志で、最も苦痛の尠い方法を探つて死を早めた方がいゝのぢやないか。人間の眞の幸福はつまりはこれ一つで、他の種々雑多な幸福は畢竟水の上の泡沫同様なものではないかと、彼れは自分に取つての最大な眞理はそれであると思込むことがあつた。動脈を切つて滴る血汐を見ながら快く死に就いたといふ「クオ、ヴァチス」の中のペトロニウスや、蠅に胸を吸はせて眠るが如くこの世を去つたといふクレオパトラの物語が思出された。さまざまの自殺の方法が繪となり文字となつて闇中に浮んだ。……しかし、かういふ類の妄



想や雑念は、明日の日になると、彼れの身に何等の効果をも與へないで、水上の泡沫同様に消えてしまふのであつた。

「君は自殺の出来る人ぢやないよ」と、彼れは若い時分でさへ、ある友人に云はれたことがあつた。情熱が乏しくなつて理性に富んでゐる人には自殺は出来ないと思はれてゐた。

友人の評語の當否は兎に角、彼れは露國の文學に接觸しだしてから、情婦と心中したり主君のために切腹したりするやうな、彼自身の共鳴しがたいやうな自殺とは、根本の異つてゐる自殺がたまに書かれてゐるのを見て、大いに心を動かされた。……アルツイパーセフ(?)の「死」といふ短篇に書かれてゐる見習士官は、姑息な感情の支配を受けないで、理性のみによつて、自己の採るべき最良の方法は自殺であると確めて、その所説を實行した。

「しかし、小説の筋をそのままに信ずるのは間違つてゐるかも知れない。どんな作者だつて思付を誇張して書くやうだから」

彼れはたび／＼心を動かされた露國の文學からも、實際上の感化は受けることがなくつて今日に到つた。それ等の文學は深夜の妄想雑念を助けるだけの力を彼れの上に揮ふに過ぎなかつた。

「今日歸つて見たら、様子がまるきり變つてゐるだらうな」と、高山は夜が明けてから云つた。

「私だちは明日のうちには立たなきやなりませんよ。お父さんもさうした方がいゝだらうつて云つてゐました。私だちに見られてゐちやお嫁さんが居づらいだらうからつて」と云つて、まつ子は今日からは自分の生れた家にも安んじて身を托する譯に行かなくなつたことを、痛切に感じた。



「東京へ行くと、差當り宿屋住ひをするんだが、厄介だな」  
「普通の女で宿屋暮しなんかしてゐる人は滅多にないでせう」  
「安い賣家でもあつたら買つて見るんだね」

先日、青木家と取引のある東京のある商店の店員が、芝に住みいゝ格安な賣家のあることをわざと知らせて呉れてゐるので、夫妻は東京へ行つたら、先づその家を見に行くことに話を極めた。

夫妻は家族と一しよに、炬燵の上でパンと牛乳の朝食を饗べただけで、匆々に暇を告げた。青木家ではすでに朝の仕度を済まして、珍らしく風呂も沸されてゐた。老主人や花嫁や、附添の老女などは、座敷に落着いて、茶器や菓子皿を前に置いて、話してゐたが、老主婦のみは落着かぬ顔して、何となしに忙しさうにしてゐた。まつ子は昨日までのやうに、勝手にどの室へでも入る譯には行かなくなつたやうに思はれた。

老主人に招かれて、二人は座敷へ入つて話の中に加はつた。花嫁のたね子は、重くるしかつた昨夕の島田を崩して、軽快な束髪にしてゐた。その方がよく似合つた。「昨夕は久振りでグツスリ眠りましたよ。これで重荷を卸して安心しました。花嫁さんとも、今朝家の氣風なんかを、掛價なしにお話し、たら、異存はない結構だといふことで、私は何よりも喜んでゐますよ。私の家も今までは殺風景でしたが、若い人が一人殖ゑたので、これからは陽氣になるでせう」老主人は、風呂の中で思出した古歌を例に引いて、寂しい庭の梅の木に来て留つた鶯を、花嫁に喩へたりして、自分の喜びを、高山夫婦にも配たうとした。

花嫁は慎みながらも、可成り快活に話をした。まつ子は明日の出立の準備をするために、奥の間へ入つて、荷造りには母の手や良三の手を借りた。



「明日はどうしても歸るの？ 何だか急に迫立てるやうでいけないねえ」と、母親は氣が済まぬやうな顔をして囁いた。

明日の晩には、三ツ目とか云つて花嫁が實家へ歸つて泊つて來るのであるが、その時の慣例や親類廻りの方法などについて、みんなの意見が聞はされた。花嫁も二つ所に坐つてゐるのは苦しかつたので、機會を見ては座を立つて、胸に溜つた鬱氣を洩らした。濕つたものを乾かしに物干臺へ行つたまつ子の後を追つて、「姉さん」と、懐つこい聲を掛けたりした。まつ子ははじめてさう呼ばれたので、座敷の中で他所々しい口を利いてゐた時とは違つた親しみを覺えて、「入らつしやいな」と招いた。そして、木蓮のはびこつてゐる隣家の中庭を見下したりしながら、打解けた話に耽つて笑ひ聲をも立てゝゐたが、その聲を聞きつけた附添の老女は、「たね子様、階下へいらつしやいまし」と、階段の下から呼立てた。

島田は重くつて頭痛がするから、明日の里歸りには束髪に結つて行きたいと、花嫁は望んだが、老女は許さなかつた。明日の朝まつ子の出立の際には是非停車場まで見送つて行きたいといふ望みをも、老女は頑なに斥けた。花嫁さんは首尾よく里歸りを済ますまでは一步も外へ出るものではない。氣儘にさういふことをさせては、自分が側に隨いてゐる甲斐がないと云ふのであつた。

翌朝は雪がちらついてゐた。旅立には相應しい日ではなかつたが、高山夫妻は豫定通りに青木家に別れを告げた。何時ものやうに良三は停車場へ見送つて荷物の世話などをした。

汽車が出ると、高山は、平穩無事で終始した他家の婚禮の事などは念頭から遠ざけて、今後の自分の方針を考へたり、窓外の雪景色を眺めたりした。堅道を滑るにつれて雪は薄くなつて、武藏の平野へ下つた時には、柔かい光があまねく照つてゐた。



吉祥寺中野あたりに、粗雑な家が建ちかゝつてゐるのが、住宅のない彼等の目を惹いた。

芝の賣家は早速見ることは見たが、問題にするに足らなかつた。彼等は、駿河臺の旅館から赤坂の宿へ、部屋は薄汚くつても閑靜なのを取得にして移轉した。そして、四五日は市中の見物がてら、貸家を捜したり賣家の檢分をしたり、建築會社を訪ねたりした。面倒な思ひまでして家を持つには及ばないといふ腹があるので、住宅を求めるに熱心が足らなかつた。折角知人が知らせて呉れた二二三の家をも、缺點を見つけては斥けた。まつ子にしても、汚い小さな不便な家を無理に求めてまで、東京住ひをする必要はないと考へるやうになつてゐた。

「あなたも洋行なさるのなら今のうちですね。あんまり歳を取過ぎたら行けなくなるでせう」と、ある日、思詰めたやうに云つた

「そりや行つてもいい。日本の内地を見て歩くよりや異つて、いゝに違ひない」

高山はかねてポンヤリ心に描いてゐたことを眞面目に考へた。しかし、それにも煩しさばかりが目先にちらついて熱心が加はつて來なかつた。歐州人も歐米の文化をも今は崇拜して居ない彼れは、長い航海の苦痛を凌ぎ、言語の不自由を忍び、外人に媚び外人の生活と妥協するの累らひに耐へることを、想像してゐると、自から決心がひるんだ。歐米人に對等に親しく突合つて貰つたことを、この上もない光榮のやうに感じて、お茶に饗されたの、どういふ話があつたのと、自分が日本人以上になつたやうに傲りがに書いてゐる洋行者の記事文を読むたびに、無自覺の標本のやうに感じてゐた彼れは、自分も洋行したら、あんな風になるぢやないのかと思ふ



と、可笑しかった。

「自分が外國へ行つたからつて、えらくなる譯ぢやないが、異つた景色や異つた生活を見るのは面白いだらう。巴里や倫敦でなくつても、知らない土地なら何處だつていゝのだよ。おれは輕便に行ける方法があればベルシヤか土耳其見たいな所へ行つて見たい。それも、一年とか二年とか云ふのでなしに、ゐられさへすりや一生でも住通す氣で行つて見たい」と、彼れはまつ子に向つて述べた。

まつ子は高山の空想が若しも實現される場合には、自分の身の振り方をどうつけていゝかと迷つて、日夜思煩ひだした。弟が結婚した後の實家へは最早安んじて身を寄せる譯に行かなかつた。女一人で東京の下宿屋に住む譯には行なかつた。高山の故郷へも自分一人だけでは手頼つて行かれなかつた。東京で知人の家に寄寓するとしても、相應しい家が思當らなかつた。

宿の近くの山王臺の櫻が咲きかけた。K市の家族は花時には、用事をかねて東京へ遊びに来るのを毎年の例としてゐるのだが、今年はどうだらうと、まつ子は結婚後の實家の様子を知りたさに、誰れか出て来るのを心待ちにして、誘の手紙を出したが、それと行違ひに、老主人から高山へ宛てた端書が届いた。

「……御出立後拙宅にも種々の事あり候へども、ゆる／＼善後策を講じ居候」と、簡単に書かれてゐるのを見た高山は、ふと心に浮んだことがあつたが、不吉な憶測をするのを躊躇して、

「下女がゐなくなりでもしたのぢやないかな」と軽く見做した。そんなことぐらゐだらうと、まつ子も思つてゐた。

ところが、その次の郵便で、良三からまつ子に宛てた手紙が届いたが、何氣なくそれを読みかけたまつ子は、中途からおびえた顔して、一字一句を穴のあくほど見



詰めた。

「お嫁さんは三ツ目に里歸りをしたつきり戻つて來ないんですつて」と云つて、重苦しい息を吐いた。

「どういふ譯で、……」高山は、縁談のはじまつてからの長い間の老主人の容易ならぬ心遣ひや、結婚前後の煩瑣な動搖を、親しく耳目に觸れてゐるために、世間に有りがちのこととして見過すことが出來なかつた。

「理由がハッキリ分らないから困ると、手紙に書いてあるのです。里歸りの晩には兩親も招かれて、大變御馳走になつて、田村家の内輪の人もみんな揃つて打解けて話をして來たのに、そのあくる朝になつて、たね子さんが頭痛がすると云つて、寢たつきりで、人に口も利かなくなつたのださうです。一日二日と歸りが延びるので、先方の心が分らないから、お父さんも行くし、良三も様子を見に行つただけけれど、

良三にもお嫁さんを會はさないんですつて。……多分駄目らしいつて良三が書いて來てゐますよ」

「家で可愛がられ過ぎてゐた女が、急に境遇が變つたので神経を痛めたのだらう。おみき(高山の妹)のやうな女でさへ、結婚したあくる朝、家へ驅込んで來て、上へ上らないうちから、聲を出して泣いて、一日寢て居たぢやないか。處女から人の妻になるのは一生の大事件なんだからね。……多分そのうちには收まるだらう。先方の親だつて、あんな立派な仕度をして寄越したものを輕卒に引取るつてことはあるまい」高山は女の心の底を察してゐるやうに云つた。可憐な處女の心が年を取るにつれて次第に太々しくなることにまで思ひを進めた。

「だけど、お父さんはどんなに心配してゐるでせう。何よりも先きに世間體を氣にしてゐる人が、世間體の悪い目に會つたのですもの。良三だつて、この結果が圓く



行かなかつたら、人間が變つてしまひますよ」

「今度の結婚は世間の注意を惹いてゐたために却つて仕末が悪いと、二人は話合つてゐた。

引續いて葉書や手紙で情報が來た。どれも良三からまつ子に宛てたものばかりであつた。良三が例になく興奮して筆を執つた有様が文字の上に現はれてゐた。事件の経過は、高山が樂觀してゐるやうなものではないらしかつた。

「仲人を煩はしても要領を得ない。……當人は以前から病氣してゐるので、従來靜養をつとめてゐたのだが、結婚のためにまた氣分が悪くなつたやうだから、今後引續いて養生をさせたいと云つてゐる。……云ふことに腑に落ちない點があるから、此方から押して訪ねて行くと、先方の父親は、お宅へは申譯がないと云つて兩眼に涙をためてゐる。……結果は覺悟してゐるが、考へてゐると頭が痛んで來てならぬ。

往來の人が變な目付で店の方を覗いて通るので、帳場へ坐つてゐると、曝し物になつてゐるやうだ」

二人は良三の手紙の文句を種にして布疋して、青木家の昨今の鬱陶しい状態を互ひの心に描いてゐた。まつ子は慰めの手紙をながくと書いて良三へ贈つた。

「あまり立入過ぎたことは書かない方がいゝぜ。かういふ問題で迂濶に差出したことを云ふと、後で怨まれることがないとも限らないから……男女關係になると、兄弟にだつて遠慮のない意見なぞしない方がいゝよ」と、高山は注意した。他に心を許して交つてゐる人のないまつ子は、良三とだけは何時までも、親しみを續けて、何か事があつた時には力になつて貰つた方がいゝと、高山は彼女のために思つてゐたのであつた。

「私が行つてお嫁さんに會つて、よく事情を訊いたらどうでせう。女同士だから、こ



ちらの出様によつちや、案外打解けた話をするかも知れませんよ」

まつ子は手紙の遣取りだけでは、痒いところへ手の届かぬやうな抵悟しさを感じてゐた。そこへ、季節の變り目で、衣類を取りに行く必要もあつたので、急に思ひ立つてK市へ出掛けることにした。

高山は電車の停車場まで一緒に行つた。まつ子に別れた後で、赤坂見附から三宅坂あたりまで散歩して、満開の櫻を見て、宿の方へ歸りかけたが、ふと、見附の側で、橋田といふ知人に會つた。橋田は高山の故郷の隣村の生れで、時々來訪してゐたので、高山の住宅についても氣をつけてゐたのであつた。

「今お訪ねしたのですよ。お家はまだ極らないのですか。……瀧の川に賣地があるんですが、一度見にお出でになりませんか。××建築會社の所有で、建築も便利な方法で引受けることになつてゐるのです」と云つて、橋田はポケットから圖面を出し

て説明した。

高山は氣乗りがしなかつたが、暇な折だつたから、遊びのつもりで見に行くことにして、橋田が案内に立つた。途中で故郷の話が互ひの口から出た。

「さういへば、此間故郷へ歸つた時に、私を乗せた車夫があなたの噂をしてゐました。あのくらゐな人物になつても、東京で生活を立てるのは六ヶ敷いと見えて、毎月お家から仕送りをしてゐるんだと云つてゐましたよ。まさか、さうぢやあるまいと私は云つとききましたが、本當ですか」と、橋田は訊ねた。

「それは無根の事でもないよ。仕送りで生きてるつていふ譯ではないがね」と、高山は立入つた話は避けて、「昔僕の名前が出掛つた時分には、僕が月々二百圓づゝ故郷へ送つてゐるといふ噂があつたさうだよ。……この頃は僕の信用は故郷の方ぢや形無しだらう」



「私も今度は、死んだ親爺の跡始末をして、持物は一切競賣にして來ましたが、これではもう故郷といふ者がなくなつたやうなものです」

「せい／＼してい／＼だらう。氣樂に喰へる道さへありや、君のやうな一人ぼつちの寺住ひがい／＼のかも知れないね」

「しかし三度々々辨當飯を喰つて生きてるのはあき／＼しますよ」と云つて、橋田はふと思出したやうに「財産が殖えれば殖ゑるで、それだけでは満足出來ないと見えて、星野の銀助さんが東京へ學問しに來てるさうです」

「へえ、今から學問しよう」と云ふのかね」高山は奇異な感じに打たれた。星野は小學時代の彼れの同級生で、首席を占めた時が多かつた。さして學才があつたのも學問が好きなのでもなく、一番になりたいために全力を盡くしてゐたので、一度その地位から落ちた時には、興奮して首席の男を目の敵にしてゐた。小學卒業後間も

なく結婚して、利殖の途に進んで、浮沈の多かつた數十年を過して、最近では早くから買占めてゐた朝鮮の土地の價格が暴騰した／＼めに、百萬長者になつたと噂されてゐる。

「神田の法律學校へ入つてゐるんださうですが、住所は祕密にして、知人には誰れにも會はないんださうです」

「金が出來たから、代議士にでもなりたくなつたんぢやないかね。今の政黨は頻りに地方の金持を誘惑してゐるらしいから」

「さあ。……しかし銀助さんは甘い口かまにうつかり乗りさうな人ぢやありませんからね。……朝鮮などで土地を持つてると、いろんな面倒な法律問題が起つて來るらしいから、辯護士まかせにしとくのが不安心なので、自分で法律を心得て置かうと思つたのぢやないでせうか」



「成程、星野の性分から見ても、あるひはさうかも知れないね。財産家になると、氣骨が折れるものだね」

二人は駒込橋で降りて、程近いところにある賣地を見た。二三軒新築が落成しかけてゐた。地所の賣買などにはまるで経験のない高山は、ところ／＼に杭を打つて區切つてある地面を見てゐると、こんな土塊に莫大な價格があるといふのが不思議でならなかつた。そして、其處に居合せてゐた肥満した會社員が、鼻聲でこの地所の價値の説明をするのを、空々しい受答へをして聞流してゐた。

「偶然の力で人間は左右されるんだね。僕の故郷の家は、菜園や貸小屋や物干場なんかを合せると、持つてる地所が随分廣い。邊鄙な土地だから、地代なんか無代價同様らしいが、あれくらいな地面を都會の近くに持つてゐたら、莫大なものだね。僕の親爺に手腕がなくなつて、この土地の地主が理財の手腕の儘れてゐた譯ぢやない。

偶然なんだよ」と云つて、彼れは莫大な價値を持つてゐるといふ空地の彼方此方を踏んで見た。

高山は橋田に別れて、獨りで上野へ出た。埃の立たない静かな日だったので、公園の花を見て、それから馴染の深い江戸川の花を久振りで見に行つた。電車が敷設されてからは其處は蕪雜な騒々しい所となつてゐた。

次手だつたから、中坂の尾越の家へ寄つて見たが、尾越は不在であつた。下女に向つて、奥様はゐるのかと訊ねると、

「ゐらつしやいません。旦那様お一人です」と下女は答へた。

「旦那様は毎日お勤めにでも行つてゐるのですか」



「いかゞですか。毎日外へお出掛けにはなりませんけれど」

高山は自分の今の住所を書置いた。尾越の妻君が今まで歸つて来てゐないことが、彼れには不思議であつた。女の方で、尾越のやうな資産家の子息と軽々しく縁を切る筈はないだらうし、男の方でも、あのくらゐな容色のいゝ女とたやすく離別しよう筈はないと思はれてゐた。

彼れは銀座へ出て食事をし、宿へ歸つたが、朝から働き通しに働いてゐたため、足が邪魔になるほどに疲れてゐた。身體が羸弱であるとはいへ、まだ五官が人並の役目をしてゐて、手足も自由に動いて、自分の始末は自分でして出来ないことがないのだからいゝやうなものゝ、もう幾年かしたら人手を煩はさなければ生きてゐられないかと思ふと、心底に捕捉しがたい不安が感ぜられた。

彼れは自分で寢床を延べて、疲れてゐる足を伸した。

が、まだ本當の眠りに落ちないでゐるところへ、電話が掛つて來たので、寢衣のまま出て行つた。掛けたのは尾越で、近日下宿へ移轉する筈だから、お望みなら家を譲つてもいゝと云ふのであつた。

高山は即答しかねた。一兩日中に御返事すると答へて置いて、「相變らずおひとりなのでですか」と訊くと、

「えゝさうです。ちよつと面倒なこともありましたが、當分一人でゐることにしました。元の下宿暮しが私にはいゝやうですよ。四五日前から鍛冶橋の側の××會社へ出勤してゐるんです」と、尾越は快活な音聲で答へた。

その音聲は、漸じて胸に悩みをもつてゐる人の聲ではなかつた。歳が若くつて氣象も大人しさうなのに、あの奇麗な妻君に未練を残さないで離れることが出來たの



かと、高山はいゝ氣持がした。人といふ人の殆んどすべてが（高山自身もあるひはその一人として）何事につけても執念臭いのを常としてゐる世の中に愛人との離別をさへ雑作なくやつてゐる人が假りにも存在してゐると思ふのはいゝ氣持であつた。

一日花見をしただけで、翌朝からは、當分部屋に閉籠つて、机に向ふことにした。世人を喜ばせるやうな材料をも手腕をも持つてゐない彼れも、十數年筆の上の修練を積んで來てゐるために、書きかければ何とか線樓を合せて相當な物が書けないことはなかつたが、心と筆とピッタリ合つたものゝ書けたことは、これまでに殆んど一度もなかつたと云つていゝ。そして、自分の技術の不足も感ぜられたが、それよりも、文字によつて自分の心が存分に現はされるものであらうかと疑はれることが多かつた。

「あなたがもつとく眞實のことをお書きになると、お作が面白く拜見出来るんですがね」と、批評家でない老夫人にある時云はれると、

「眞實の事を大切にするのなら、書かないのが一番いゝのかも知れません」と、彼れは答へた。

虚偽か眞實か、彼れは三四日の間、机の前に坐つて筆にいみ親しんで暮した。そして住宅の事は忘れたやうに、尾越に對する返事さへ出さないでゐたが、すると、頭腦の倦怠した日暮頃に、ふと尾越の來訪に接した。部屋へ入つて來ると、尾越はあつちの穢るしくつて陰氣なのに驚いたやうであつた。高山は仕立卸らしい新しい背廣を着けた珍らしい尾越の洋服姿に、意味ありげな目を注ぎながら、

「この頃は家内がゐませんから、まだ御返事をしなかつたのです」と言譯した。

「かういふ所でよく御勉強が出來ますね」と云つて、尾越は珍らしい物を見付けた



やうに、机の上の書き物に目を注いだ。

「僕の仕事は何處にゐたつて墓取らないのですが、あなたの方はどうですか？」

「二三日前から受持が極つて、正式に出勤してゐるんですが、生活が規則的になつて身體のためにもいゝやうです」

「さうでせうね。僕などもある時間から時間までの間を、いやでも働かなければならんやうにした方が却つて自分のためにいゝのぢやないかと思ふこともありますよ」と云つて高山は會社の仕事の有様を訊ねて「それで、あの石本とかいふ人の事はどうになりました？ いけない魂膽があつたのですか」

「大した企みはなかつたのでせう。あの金はちやんとワイフの手に渡つてゐるんですから」と云つて、尾越はあの話の續きを話すのが義務であるやうに話しましたが、言葉に熱心は添はなかつた。

「あれから石本に會ひましたが、あの女は笑ひ事で済まして、ワイフを私の家へ收めて元の通りしようと極めてかゝつてゐるんです。亭主の留守に勝手に遊び歩くくらいは、私だちのこれまでの生活から云へば何でもないことなので、書置きまでして出たのも、一時の氣紛れに過ぎないと云へば云はれるので、私も世間の習慣を楯に取つて、いきり立つて争ふ氣はなくなつてゐたのですが、この先何時までも彼奴と一しよにゐるのぢや、私の精神が死んでしまひさうに思はれましたから、今が天の與へた時機だと思つて頑張つて見たのですよ。無論私がいくら頑張つて見たつても、ワイフがヅカ／＼歸つて來ようなら、私が負けてへこ垂れてしまふでせうが、彼奴意地つ張りな上に、私を離れたつて廢れ者になる女ぢやないですから、石本の手を経て私に拘つて來るばかりで、直接に私に打突かつて來ないから、私も助かつてゐるんです。……ワイフには親戚が二三人東京にあるんですが、そんな所へは寄りつ



かないで、石本の家に同居してるやうです。……特別に憎み合ふ事情があつた譯ぢやないから、会社の歸り途なんかには、ふつと會つて見ようかつて氣になることがあります、見てゐて下さい。私がワイフに會つて愚圖々々で一しよになるやうだつたら、私といふ人間はそれでもうおしまひなのですから」

「だけど、一度妻君を持つたことのある男が、獨身で下宿住ひなんかしてゐられるものでせうか」

「私は女が嫌ひになつて、一生女を絶たうと思つてるんぢやありませんよ。……それに、私のことだから、外の女にでも關係すると、ぢきにまた捲込まれるかも知れないんですがね」

臆面のない尾越の言葉に、高山は不快な反感を起した。妻君の素性の卑しくないことや恰愼なことや、遊び事にかけても敏捷なことなどを、尾越は平然と話してゐ

たが、やがて、「御飯前なら、晚餐を突合つて下さいませんか。この頃は晚餐は大概友人と一しよに食べることにしてゐるんです」と云つて、高山を誘ひ出した。

尾越は有名な飲食店の所在を可成りよく知つてゐた。そして、一二度來たことがあるといつて、お座敷天ぶらの出来る山王下のある家へ入つて行つた。料理の支度の出来る間に電話で、ある友人を呼び出して、明晩の會食の約束をした。

まつ子が、宿屋では思ふやうに出来ない汚れ物の洗濯をしたり、差迫つて入用な衣服を取出したりして、K市から歸つて來た時には、高山の取掛つてゐた机上の小さな仕事が終わりに近づいてゐた。

「もう一日か二日でこれが片付くんだから、それまでは面倒な話は聞かないことに



しよう」と云つて、彼れは筆の運びの妨げられるのを恐れた。神経の少しの動搖でも直ぐに筆の上に影響して、書きかけた物を引裂いたり反古にしたりすることが、たび／＼あつたが、彼れのさういふ癖がまつ子には可笑しかつた。そして、時々、裂かれた物を貼合せたり棄てられた物を拾集めたりして机の上に載せとくこともあつた。そんな廢物も何時か高山の手で利用された。

「私も汽車で疲れて、話をするのも大儀だわ」と云つて、まつ子は横になつて休息したが、こない／＼季節に、埃っぽい宿で徒らに日を過してゐるのが、腹立たしいほど詰らなく思はれた。

「あなたが早く方針を極めなければ、私の方針も極りませんよ」まつ子は焦燥の感じに堪へられなくつて口走つた。今度見て來た實家の内情よりも、自分たちの境遇が一層痛切に胸に迫つて來たのであつた。

「まあ、もう少し待つてろ」

高山は、今の仕事が終わらへしたら、自分たちの身の處分について、い／＼考へが淨んで來さうに思はれてゐた。(自分が工夫して書いてゐる拵へ事から、却つて反射的に刺戟を受けて、鈍つてゐる心が磨かれて、自分の實生活についてもい／＼分別が出て來さうに思はれてゐた)

いよ／＼筆を擱いて一息吐く間もなく、意外にも青木家の老主人が訪ねて來た。顔や態度には心の屈托が少しも現はれてゐなかつたので、高山もさしていた／＼しい思ひをしないで、その後の經過を訊ねることが出來た。

「とに角親類廻りだけはさせて、祝つて呉れた家へも返禮をすましましたから一心です。身體からだが悪いと云ふのだから、先方の氣儘にさせて、當分養生をさせることにして置きました」と、老主人は答へた。



「しかし、急に身體からだが悪くなつたつていふのも變ですわね」

「私の方でも、はじめのうち先方の仕打がいにも誠意がないと思つてゐましたが、先方の両親の腹が多少分つて見ると、強いことは云へなくなりませよ」

機嫌よく實家へ行つた莊嫁が、歸つて来るべき時に歸つて来ないので青木家の人々は寢耳に水のやうに驚いた。口ではあゝ云つてゐたものゝ、家の山が穢わづしくて不式なのが、若い女の氣に入らなかつたのであらうと、老主人はかねて氣遣つてゐたことを思寄せて獨り極めにした。仲人が先方の意を通じて来るのも空々しかつたし、譯を糺ただしに良三を先方へやつても、當人には會はれなかつた。花嫁持參の華やかな調度を経えず見せつけられながら、親子で善後の方法を講じてゐるのは苦しかつたが、何かにつけて出入する親戚や知人に返答のしようのないのが尙更苦しかつた。老主人はかつて經驗しなかつた世間の狭い思ひに惱まされなければならなかつた。

た。

「いつそ、道具を一切送返した方が奇麗サツパリになつていゝかも知れないのだが」と、老主人は歎息してその氣になつたが、此處まで運んで来た結婚の道筋や、そのために消費した勞力や金の事を考へると、纏められるものなら平穩に收めたかつた。

「どうせいけないのなら、早く見切をつけた方がいゝぢやありませんか。長引かすだけ此方が馬鹿を見るんですからね」と、親戚の一人で冷靜な差出口を利くものもあつた。

鬱陶しい日何日か續いた後、先方の父親が訪ねて来た時には、老主人もわれ知らず、昂奮した。

「あなたの仰有ることは誠意がない。仲人からいろ／＼承つてはゐますが、どれ



があなたの本心やら分らないのだから困るぢやありませんか。お預りしてる物を何時お引取りになつてもいいやうに、私の方では覺悟はして居ります」

「誠意がないとお腹立ちになつても、私の方では一言も御座いません。自分の注意が行届かなかつたことをお詫びする外はないのですが」と云つて、田村の老人は目を伏せたが、一二滴の雫が膝の上に落ちた。しかし、青木さん、私は一人の娘を戯談に結婚させたのぢやないですから、私の心もお察しを願ひたい。長い目で見てゐて下さればお分りになることですが、此方との御縁に不平のあらう筈がないぢやありませんか」

「それでどうなさるおつもりなんです」老主人は相手の涙を見ると、強いことは云はれなかつた。

「何しろ身體が弱いのですから、閑靜な所へやつてみつしり養生させたいと思つて

ゐますのです。子供の持つてゐる壽命を見すゝ縮めさせるのは、私も親として忍ばれませんので、申上げにくいことも申上げる次第なのです。世間體の悪いことも萬々承知しては居りますが、子供の壽命には替へられません」

田村の老人は、一二年前からの娘の健康状態について話して、そのために此方との縁談を喜びながらも延ばし延ばしして來たことを打明けた。

「さう云はれて見ると、老主人は誰れを相手に争ふことも憤ることも出來なかつた。せめて重なる家へだけでも花嫁に顔出しして貰つて、あとは向うまかせにする外に、執るべき手段はなかつた。

老主人の話振が概括的なので、高山はこまかい陰影を知ることには出來なかつた。かういふ場合の處置について意見を訊かれても、確信のある返答をすることが出來なかつた。



老主人が用足しに出てゐる間に、まつ子は高山に向つて、

「私が行つてゐる時に、たね子さんは一度お父さんに連れられて話しに來ましたよ。その時良三に、お腹の中をよく打明けて話したのでせう。……そのまゝ落着くのかと思つたら、お父さんが急立てゝ連れて歸つたんですがね。金紗に櫻の花を散らした衣服を着て帯を高々と結んだ花嫁さんが、店員が差掛けた薄緑の派手な模様ついた雨傘を持つて店先を出て行つた時には、誰れの目にも奇麗な花嫁さんに見えましたよ。良三には尙更さう思はれたのちがひありませんよ。……だからこれからはお父さんの一存では行けなくなるでせう。良三も此間までの良三とは違ひますからぬ」

まつ子は田村の老人のやうな父親を有つた花嫁の心強さに思及んで、「世間體よりも娘の生命を大事にするんですもの」と、ある感じを籠めて云つた。

その夜、高山は老主人を誘つて、有樂座の名人會へ出掛けた。寺子屋を語つた呂昇の聲はまだ昔ながらの艶を有つてゐた。演藝には多少の興味をもつてゐる老人は、久振りで聴く名手の音曲に感歎しながらも、此間うちの心勞が出て來たやうに、屢々目を閉ぢては假睡の寢息を洩らした。一仕事終つた後で心の弛んでゐる高山も、呂昇の聲に誘はれて、をり／＼首を垂れては昏睡の夢心地になりかけた。淨瑠璃の中の喜怒哀樂の聲々が、遠い浮世の騒ぎのやうに幽かに彼れの耳に響いた。そして、  
“Anywhere, anywhere, out of the world”  
と云つた誰れかの聲が、彼れの力のない心の底で聞かれた。

いろはおくりの半ば頃にふと目を開いた二人は、座を立てて歸りを急いだが、その夜は、古人が美しくと見た朧月が春の都會の空を照らしてゐた。

宿へ歸へつて、狭い部屋に三人が枕を並べて寢床に就く前に、



人さまへ

三三三

「私の家も當分二階がみんな空いて居りますから、御都合で何時でもいらつしや  
い」と、老主人は云つた。

妹の縁談



妹のおすては小柄で瘦つぽちで目に険があつて、どちらかと云へば、人好きのする方ではないが利發な女であつた。そして、見掛けに寄らず呑氣で、年齢が若いくせに、何事にも諦めが早くて、不幸をも不幸として悲むことが稀であつた。殆んど同時に父にも母にも別れて、叔父の家に數年間寄食した後で、東京のある商店の勤め人に嫁してゐた姉を手頼つて、富士の山裏の生れ故郷を出て來たのであつたが、二年も経たぬ間に、運悪くも姉婿に死なれて、姉妹二人きりで、他に縁者のない東京で世を送らねばならぬやうになつた。

姉のおきたに子供のないのはまだしも幸ひだから、姉妹とも故郷へ歸つて來いと、田舎の叔父が親類の義務として、あるひは手紙によつて、あるひは上京の次手にた

びく勧めたのであつたが、姉妹とも勧めに従はなかつた。

「故郷へ歸るなんていやなことだわ。今歸つたら二度と東京へ出て來られないに極つてるんだもの。東京にゐたつて自分一人の糊口に困りやしないのに、田舎で叔父さんなんかにかき使はれて、氣兼ねしいく不味い御飯を食べさせて貰ふ氣にどうしてなれるもんですか。」と、妹が云ふと、

「私だつてさうさ。お墓詣りに歸るくらゐならいゝけれど、この年齢になつて親類の厄介になり歸るなんて、考へてもゾツとするよ」と、姉も云つた。

姉妹は家賃の安い家へ移轉して、二人きりで睦まじく助け合つて日を送つた。おすては姉婿の周旋で日本橋のある西洋物の雜貨店へ通ひ奉公してゐて、朝早く出て夜もおそく歸つて來るので、月に二度の休日の外には、晝間は家にゐることはなかつたが、でも出勤前や歸宅後には、家の用事の手助けをして夕飯がおそくなつても



成べく姉の傍で食ふことにしてゐた。

移轉後一年は何事もなく過ぎた。おきたは何か自分にでも勤まりさうな職業を捜さうと心掛けて、「私もすてちゃんに負けない様に働きたいと思ふよ。何時まで詰らないことを思出して泣いてゐたつてはじまらないから」と、夫の死後妹に向つてよく云ひくしてゐたが、身に覚えの藝があるのではないから、これならと自分から乗出せさうな職業は見つからなかつた。それに僅かばかりでも夫の残して呉れた貯蓄があつて、儉しくすれば、二年や三年遊んで暮らせないこともないのだから、一時の意氣込みも何時となしに挫けてしまつた。

「すてちゃんにいゝ縁があつて身の極りのつくまで、淋しくてもかうして暮してゐることにしませうよ。私は私で考へてることもあるから」と、腹の中に確りした量見があるやうに云つてゐたが、その實淨かりぼんやりで一日々々を過してゐるに過ぎ

なかつた。隣家の小さな女の子を手懐けて、小半日も遊び相手になつたり、時としてはその子に引張り出されたやうに人前を装つて氣さくな主婦のある近所の駄菓子屋の店先へ寄つて、世間話に笑ひ興することもあつた。

實の姉妹としては顔立の似てゐる方ではなかつたが、男の目を惹くやうな目鼻を具へて生まれて來なかつたことは、おきたも妹と同じかつた。

でも、暇にまかせてよくお化粧をした。妹よりも白粉の使ひ方が烈しかつた。隔日くらゐに寝る前に妹と一緒に湯屋に行く外に、晝間自分一人で思ひきり長浴をして來ることがあつた。

「子供でもあればだが、獨り身で何もしないで暮すつてことのある筈はない。何か



の都合で同居の出来ないやうな情夫があるのだらう」と有振れた邪推をして竊かに探偵的に耳目を尖らせる者もあつたが、後暗いところは近所の人の目にもつかかなかつた。それは、容色にも様子にも色つぼいところは極めて乏しいのだから、事に尾端をつけたがる隣近所の噂も、どうすることも出来なかつた。

おきたは、夫の死後の自分の身持の潔白を、夫の身内や知邊や近所の人達に誇る氣は少しもなかつたが、當てのない獨身生活をさして寂しいとも心細いとも、あるひは變挺とも思つてゐなかつた。それは無論夫の生きてゐた時分の方が世の中が面白かつたのには違、ないが、獨身に馴れて見ると、叔父などが案じて呉れるほどの不幸な身分とは思はれなかつた。……南京豆でも買つて来て、一人でお茶を入れて飲んでゐても、永い日の半日くらゐ結構過すことが出来た。口が利きたければ、隣家の子供を呼んで来るまでもない、猫を抱いて何かブツ／＼云つてゐれば氣が濟んだ。

妹の休日をばおきた自身も休日として、姉妹連れで上野や淺草へよく出掛けた。一度出がけに脱つ放しにして置いた二人の衣服を、空巢ねらひに浚はれたことがあつたが、姉妹は手輕に諦めて、さして愚痴をこぼさなかつた。「出来たことは仕方がないわ」と、おすては例の香氣な口調で云つて、その翌日手丈夫な鏡まへを買つて來た。「これから氣をつけることにしよう」と云ひながら、おきたは、毎日のことでも面倒だから、相變らず戸締りを疎略にして近所へ出歩いてゐた。

秋も末のある日、霖雨が霽れて、温かい、いゝ氣持の日に、おきたは俄かに思立つて、一人で雜司ヶ谷の夫の墓へ詣つたが、すると、あの後往來の止絶えてゐる夫の從兄の家へ寄つて昔の話でもしたくなつた。從兄の女房のおさくの慾張りでヅルイことは夫の存生中屢々聞かされてゐたので、おきた自身も好意をもつてはゐなかつ



だが、その日は久振りで會つて見たいやうな懐かしさを感じた。

で、些つとした手土産を調べて、廻り道して、飯田町のその家へ行くと、従兄はすでに一月あまりも勤め先の用向きで北海道へ行つてゐて、女房一人で留守居をしてゐるので、おきたの訪問を非常に喜んだ。

そして、無沙汰の挨拶もそこ／＼に、

「お話したいことがあつて、先日からお訪ねしよう／＼と思つてたんですよ。丁度いゝところへ来て下さつた」

調子づいた女房の言葉を、おきたは怪訝に感じながら、

「どんなお話なの？ いゝ事があるんですか」

女房のおさくは、「その話は後でゆつくりしますから」と云つて、先づお互ひの近状を訊ねたり聞かせたりしてゐたが、おきたは、小いながらも生活向きの可成り豊からしいこの家の様子を見ると、自分達の生活を見窄らしく不景氣らしく思はれるのが厭になつて、いかにも氣樂に暮らしてゐるやうに吹聴した。妹の事も店の主人に信用されて、この頃法外に給金が増したなど、眞實しやかに話した。

「すてちゃんは感心ね、よく辛抱して。良人でもあの女は確りものだつてよく褒めてゐるんですよ」と、おさくは乗出して、「實は私がお話したいと云つたのは、すてちゃんのことなんですがね」

「ちや、いゝ縁談があるんですか」おきたにもそのくらゐなことは察せられたが、わざと、「實は先日からの女に縁談の口が二つも三つも掛つて来てゐますの。だけど、當人は今のよこ、自分の働きで立派に暮して行けるのに、急いでお嫁さんになつて、



早くから氣兼ね苦勞をするのは詰らないと云つてゐるのだし、私にしても餘程先きを見定めてからでなければね、迂濶に勤める氣にやなれませんよ」と、一見識を見せるつもりで云つた。

「それはさうですとも、だけど、他所様のはどうか知らないか、私はいゝ加減な處へはお世話すりやしませんよ。此處ならすてちゃんのために幸福だと思つてゐればこそお話ししようと思つてるんですからね。それはすてちゃんはまだ歳も若いんだから、急いでお嫁に行く必要がある譯ぢやないでせうけど、いゝ所があれば早く身の定りをつけるに越したことはないぢやありませんか。」

「でもねえ」と、おきたが相手の好意をもつた話を喜んで聞かうともしないので、おさくは張合ひが抜けて、些つと微見かしたばかりで縁談について詳しいことは云はなかつた。

先方次第で日暮れまでも腰を据ゑて遊んで行くつもりで寄つたのだつたが、妹の縁談が出たゝめに、何となく厭氣が差して、おきたは匆々に暇を告げた。……あの慾張りやさんのことだから、結婚の取持ちして、何か甘い汁を吸はうと思つてるに違ひない。浮かりあんな女の話に乗つて溜るもんぢやない」と、家へ歸つてからも、ひとり考へてゐたが、平生夢のやうに考へて、座興の話の種にしてゐた妹の結婚が眞實に目の前に迫つて來てゐるやうな氣がして、おきたの神經も不安に震へた。

「その間お邪魔に上りますよ」と、おさくの云つてゐた言葉を危みながらも妹へは、墓参りの事のみ話して、飯田町へ寄つたことは一言も口外しなかつた。

「ぢや、今度の休日には私一人でお詣りして來ようか知ら。……雜司ヶ谷の方は田舎だから、今時分は眺めがいゝでせうね。紅葉なんか綺麗だつたでせう」と、おすては一緒に行けなかつたことを残念に思ひながら訊ねたが、おきたは、「今日はお天氣



がよかつたから、外を歩いてゐても気がせい／＼するよ」と云つただけで、田舎の眺めがどうだつたか、そんなことは些しも彼女の頭に残つてはゐなかつた。

以前はおきたの方が先きに目を醒まして、飯仕度に取り掛りながら妹を呼起すのが例になつてゐたが、この頃は、却つておすての方が先きに起きて、出勤時刻におくれぬやうに氣忙しく身仕度するのが、殆んど毎日の例になつた。日ましに朝が寒くなつて、寢床を離れ難くなつたけれど、日々の勤めを怠らないでゐる妹の手前、朝寢に耽つてはゐられなくて、おきたも寒さ眠さを我慢して、妹を送出すまで手足を働かせるのであつたが、一人になると、長火鉢に寄掛つて新聞の拾讀みをしたり、温かいところを慕つて来る小猫を膝にのせたりして、洗濯物が溜つてゐようとも、そ

んな事のためには容易に身動きをしなかつた。無性をするこの楽しみ、恣に寝たり起きたりすることの楽しみが次第に彼女の日々の重なる楽しみになりきつて、顔のお化粧は兎に角、家の中は引越して來た當時よりも、却つて汚れて亂雑になつた。裏所の隅に鼠の糞が溜つてゐたり、便所には蜘蛛の巢の切れつばしが何時までも残つてゐたりした。

意外に亡夫の従兄が訪ねて來た時には、おきたは自分一人で茶を入れて、矢鱈甘納豆を抓んで、口をモグ／＼させてゐたところであつた。その日は薄曇りで風が冷かつた。

従兄は以前よりも一層肥つて元氣がよくなつて、見るから有福らしかつた。おさくが來たのなら縁談のことゝ察しがつくが、従兄ではさうではあるまいと、おきたは氣を許して、いろ／＼と内輪話をしてゐたが、従兄は、



「貴方のことはまた別の話だが、先づすてちゃんの身をどうとか極めなすつちやどうです？ 餘計な差出口かも知れないが、若い時は間違ひのない内に相應なところへ收めといた方がいゝですよ。すてちゃんに對しては貴方が監督者で、一番に責任があるんですからね」と、話のつまりは縁談を持出した。

歴つけがましいのを、おきたは一概に斥けかねて、従兄の望みのまゝに見合ひの事をも承知した。従兄の話におまけがないのなら、先方の男は歳は少し取過ぎてゐるが、ある小さな工場の職工長になつてゐて、多少の財産もある上に此地には係累がないのであつた。極く堅い男であつて、容色望みはしれないが、艱難に堪へられるやうな聡りした女が愆しいと云ふのであつた。

「私の云ふことはよく聞く男だから、話は屹度纏まりますよ。」と従兄は獨りで呑み込んで歸つた。

おきたは妹の歸つて來るのを待つて、自分の考へは少しも附加へないで、従兄から聞かされたことを話した。

「折角さう云つて呉れるものを断れもしないから、見合ひには行つてもいゝわ。」と、おすては、いかにも事もなげに答へた。

「その人け少し歳を取り過ぎてるやうだけれど、さういふ家へお嫁に行く氣にすてちゃんはなれるかい。」

「さうね。よく考へて自分でいゝと思つたら、行くことにしないと限らないわ。」

見合ひの日にも、妹は平生通りに自分で髪を束ねて、お化粧にもさして身を入れ



なかつたが、姉は平生行きつけの髪結ひに特別念入りに結つて貰つて、粧飾にも骨を折つた。縮緬の羽織も久振りに役に立つて、指環も質草にならないのを二つも使めたが、たゞ穿物が安つぽくて汚いのが、自分自身に氣になつた。

見合ひの場所は、従兄の家で事によつたら一緒に晚餐を食べに烏屋へでも行く筈であつたのが、先方の都合で變更して、倉田といふ當の男と従兄とが話してゐるところへ、些つと顔出しゝたのに止まつた。お壽司の御馳走も姉妹は茶の間でおさくの取做しで、氣輕に饗ばされて、倉田が従兄に隨いて出て行つた後で、お互の返事は後日に譲つて暇を告げた。次手に淺草へ廻つて活動を見物して、可成り夜を更して家へ歸つたが、倉田といふ男の年齢よりも老けて見える顔は、妹の心を一層強く異様に刺戟してゐた。おきたにだけは、倉田の顔が不思議に死んだ亭主の顔に似通つて見えるのであつた。最初一目見た時にさう思はれて驚いて、よく見るとさうで

もなくなつたが、家へ歸つてから思出すと、確かに亡夫に似てゐるやうであつた。

しかし、妹に向つてそのことを口にするのは何となく憚られたので、たゞ、

「些つと見たゞけでも働き手らしいのね」と云つて、「先方でいゝと云ふ返事があつたらあなたは行く氣になつて？」と訊いた。

「姉さんはどう思つて？ 姉さんが行けと云へば私さう決めることにしてもいゝわ」と、云つておすては、見合ひに行、前と同じやうに、見合ひをした後でもさして變つた感じは起さなかつた。

「御自分の事だから、まあよく考へて御覽なさい。急いで返事をするには及ばないから」

おきたは、いよく話の極つた後の仕度の事などを話してゐたが、

「そして、若しも私が他所へ行くやうになつたら、姉さんはどうするつもりなの。



「一人でこの家にゐる譯には行かないわね」と、妹は訊ねた。  
「さうしたら、一人で二階借りでもして暮すさ。」

おきたは事もなげにさう云ひながら、この頃には淋しさ心細さを感じた。廣い東京に姉一人妹一人といふ手頼りない境遇であつたのに、その大事な妹一人を他人に奪はれかけてゐるやうで忌々しかつた。ことに妹を奪はうとしてゐる相手の男が自分の死んだ亭主に似てゐるので、おきたの心は一層異様に動揺した。

その夜は寢床へ入つてから、夫の生きてゐた昔が頻りに追憶されたが、それについて、倉田の顔や態度がますます夫に似てゐるやうに思はれてならなかつた。

「おさくさんもおすても誰れもさう思つてゐないらしいのが不思議だ」と疑つた。翌日は妹の出て行つた後で、久振りて夫の寫眞を手箱の中から取出して見たりした。

おきたは妹を自分の側から腕取られるのが恐ろしさに、むしろ先方から破談にして呉れるのを望むやうな氣になれて仕方がなかつたが、三四日後に従兄がわざわざ訪ねて来るのを、駄菓子屋の店先で一目見ると、最早破談の望みは絶えたやうな氣がした。男の方で進まないのなら、手紙で知らせて寄越すだけで澤山であらうのに、従兄自身に再び足を運んで来たのは、いよ／＼話が纏まりさうなのに違ひないと察して、従兄夫婦の取做しが入らざるおせつかいのやうに思はれて憎かつた。

驅戻つて急いで雨戸を開けて、埃つぼい座敷へ従兄を迎へたが、従兄は商用である日から續いて忙しいのを繰合はせて些つと来たことを恩がましく云つた。

「實は話が妙なことになつてね」と、従兄は薄氣味の悪いニヤ／＼笑ひを浮べて、



「間に立つた僕達が當惑してるんだが、一體すてちゃんは倉田に對してどう思つてゐますかね。自分であの男のところへ行きたいと思つてるやうですか。」

「あの女は私次第で、決して我を立てやしませんです。だから、私の方で手落ちのないやうに、後で後悔の起らないやうに、先様の内輪の事もよく糺してから御返事しようと思つてゐますのですが、倉田さんはおすてが氣に入つたと云つてゐらつしやるんですか」

おきたがいやに堅くるじい口を利くのを、従兄は可笑く受けながら、

「ところがそれが妙なのでね、ザツクパランに云つちまへば、倉田は成らうことなら、姉さんの方を貰ひたいと云つてるんですよ。それが甚だ熱心なので、僕達も些つと面喰つて挨拶に困つてるとこなんです」

「戲談もいゝ加減になさいました」おきたはテレ隠しにさう云ひながら、やゝ顔を

紅らめて胸に波打たせた。

「僕もはじめは戲談にしてゐたのだが、さうでないから驚いたのさ。すてちゃんに知らさない前なら話の仕様もあつたのに取返しつかないことをしたと、おさくと二人でくやんでるんです。少し差出した話だが、貴女もこの後一生獨りで通す譯には行かないとすると、今度のことは僕の方からお勧めしたいやうないゝ縁だつたのに残念なことをした。倉田はすてちゃんのお婿さんにするには歳を取り過ぎてゐるのに、僕達もあんまり迂濶だつた。」

その日従兄は倉田の意中を傳へて、妹との縁談は纏まる見込みのないことを斷言したが、そのかはりに姉の方の取持ちしようと努めもしなかつた。たゞ見合ひの結果の案外だつたことを話して残念がつたゞけで歸つた。

おきたはそれつきり歸つて行く従兄を飽氣ない思ひをしながら見送つた。そ



倉田の顔をますます亡夫に似てゐるやうに思倣して、心をドキメキさせてゐた。  
「あんなことを云つて擲論ふんぢやあるまいか」と疑ひもしたが、考へれば考へるほど夢心地がした。

何にしても妹に打明けべきことではないので、おきたはその日から縁談に關はつたことは一切口に出さぬやうにしてゐたが、おすての方からは無論その事について話しかけはしなかつた。日々の勤めに怠らないで、結婚のことなどまるで忘れてゐるやうであつた。

四五日は過ぎた。従兄の方からあれつきり音信のないのが、おきたには抵牾しくてならなかつた。従兄の仕打が冷淡で、自分が侮られてゐるやうで忌々しかつたが、

此方から訊ねるのは變だつたのでどうすることも出来なかつた。

ところが、意外にも妹の口から見合ひの結果がアケスケと語られて、おきたは間の悪い思ひをさせられた。その日妹は少し早目に店から歸つて来て、平生せいでんよりも浮かぬ顔をして、無駄口も利かないでゐたが、食事を済ますと、いやに改まつた口調で、

「私、今日飯田町の従兄さんに會つてよ。午後ちひるすまにわざ／＼お店へ訪ねて来て呉れたのです」と云つた。

「ぢや、先日さきひだの事で直接ちかに貴女に話したいことがあつたのだらう。従兄さんはどんなことを云つて？」と、おきたが空呆けてゐると、妹は何の遠慮もなく、従兄の話はなしを傳へた。そして、

「従兄さんは、私にはもつと若い、性の合つた働き者を世話をするからつて、餘計な悦しがらせを云つてるから可笑くつてならないの。私些とも失望なんかしてゐな



いのに、御自分一人でさう極めて、申譯がないなんて謝つてゐるんですもの。従兄さんも随分馬鹿な人だと私思つてよ。……その上、實は見合ひを勧めた時にも、事によつたら姉さんの方を世話しようがとあの人は勝手に腹の中で思つてゐたんですつて。それだと、私達は夜店の賣物見たいに撰取り御隨尊に並べられたやうなものだわね。今更取返しはつかないけれど、そんな目に會ふと知つてたら、いくら勧められても行くんぢやなかつたのに。姉さんだつてさう聞くといい氣持はしないでせう。親が無いと思つて、私達を見くびつてゐるのよ」

「まさか見くびつてゐる譯ぢやあるまいけれど」おきたは自分を見てゐる妹の目を次第に眩しく感じだした。

「それで姉さんはどうするつもりなの？ 従兄さんは姉さんを倉田さんとかへお世話しようと思つてゐるのよ」

「私だつて従兄さんの言ひなり次第になりやしないよ」

「成べくなら姉さんも斷つて下さいな。姉さんがキツパリ斷つて呉れれば、私、従兄さん達に對してどれほど小氣味のいい思ひをするか知れやしないわ」

これまで何事にも屈托しない呑氣なおすても、はじめてこれだけは姉に強請しようとした。自分の縁談の纏まらないのはさして苦にシなかつた彼女も、倉田と姉との縁が萬一にも成立つかと思ふと、生來嘗て覺えなかつた云ひやうのない不快を感じた。

「それはすてちゃんに云はれるまでもないさ」と、おきたは自分の再縁のことは些しも念頭がないやうに云つて、妹の心を安んぜさせたが、あまり手易く妹に信ぜら



れるのが後目たかつた。

寢床に就いてからも、これまで寂しい獨寢の手頼りになつてゐた妹の寢息が、自分の幸福を妨げるものゝやうにおきたの耳に響いた。人間が確かりしてゐて生活も豊かだといふ倉田を取逃したなら、自分のためにまたとこないゝ運が向いて來さうには思はれなかつた。そして、倉田の顔形が死んだ亭主に似てゐるとの確信が彼女の鎮まりかける神経を突いて、どんな事でもさせさうに方を添へた。先方が眞に自分を思つて呉れて縁組みしたいと望んでゐるのなら、妹風情に遠慮してなるものかと意氣込んだりしてゐたが、すると、夫と一緒に住んでゐた時分のこと、夜の間にまさゞと浮出て、懐かしさの涙が珍らしくも彼女の睫毛を濡らした。

おすての方では一時の厭な思ひも、一夜の熟睡によつて拭はれたやうな元氣な顔して、「今日は姉さんの好きな物を買つて來るから楽しみにして待つてゐらつしやい」

と、姉を喜ばせるために云つて勤めに出掛けた。

「今日は寒いから風邪を引かないやうに用心おしよ」

おきたも悦しがらせを云つて送り出したが、一人になると、今までのやうに薄ぼんやりで時を過してはゐられなくて、何時までも長火鉢に嚙りついたまゝ一つ事を考へ込んでゐた。可愛い目をして側の猫板に蹲まつてゐる小猫もかまひつけられなかつた。叔母さんと呼んで縁側へ近寄つて來る隣家の子供にも何時ものやうないゝ顔は見せなかつた。

亡夫の寫眞を側に置いて、屢取上げて見入つたりしてゐたが、夜になつて、約束の土産を持つて歸つて來たおすては、「寒い〜」と云ひながら、長火鉢の側に寄つて手を翳すとゝもに、ふと寫眞を見つけて、

「兄さんの寫眞？」と云つて手に取つて、「今日誰か遊びに來たの？」



「いゝえ。誰れが来るもんですか」

「ぢや、姉さん一人で寫眞を出して見てゐたの」おすては變に思ひながら、姉の顔と寫眞とを見比べた。

「搜し物してゐたら寫眞が出て來たのさ」おきたは、その寫眞と倉田の顔との類似に妹さへ氣がつかないのを齒痒く思つたが、「すてちやん。私いつそ田舎へでも歸らうかと思ふよ。何時までかうしてゐたつて果しがないからね。」

「死んだ人の寫眞を出して見たりするから、そんな情ない氣になるのよ。姉さんが、そんな氣になつちや私心細くて困るわ。」

「貴女は毎日賑かな所へ行つて、仕事してゐるんだからいゝけれど、私を御覽なさい。毎日洗濯か掃除か、詰らない用事しかする事はないぢやないの」

「姉さんも今日はどうかしてるわね。……私なんか今日のやうな寒い日にも一日立

つてばかりゐて、坐ることさへ出來ないんだから、あんまり樂な仕事ぢやないわ」

姉妹は家にゐることの詰らなさと、外へ勤めに出ることのつらさを、互に負けずと言張つてゐたが、やがて、おすてはふと、こんなことを氣色ばんで言争つてゐるのが可笑くなつて、

「詰らなくつてもつらくつても、それぐの運だから仕方がないわ。そんなこと云つてるよりも早くお茶を入れて、これを開けませうよ」と、不吉な寫眞は遠くの方へ押しやつて、萩の餅の入つてゐる折詰の蓋を取つた。そして、旨さうに食べながら、例のやうに朋輩の噂などしだしたが、姉の方で例のやうに面白がつて聞いて呉れなかつた。



「だけどね、すてちゃん。若しも私が田舎へ歸るやうだつたら、お前はどうするつもり？ 一人で東京にゐられるかい。」

姉がくどくそれを訊ねるので、おすては、「さうなれば覺悟しますさ。私東京にゐてどんな目に會つたつて、田舎へ歸る氣にやなれないわ。叔父さんにも幾度もさう云つてゐるんだから」と、腑甲斐ない姉を嘲けらぬばかりの口吻で強く云つた。

「貴女にそれだけの覺悟があれば私も安心だよ」

おきたは何喰はぬ顔して云つたが、心の中では竊かに、自分が再縁して妹と離れる場合を想像してゐたのであつた。

翌日からおきたは從兄の音信か何かを待受けながら今までよりも一層念入に化粧をしたり一層長く湯に浸つたりした。燈火の點く時分に、ふと格子戸が開いたので、從兄夫婦の何方かと定めて、胸を轟かせながら飛出したが、入つて來たのは意外に

も田舎の叔父であつた。夜汽車で來て、一日買物をしてゐたと云つて、いろ／＼な包物を持つて入つた。夜目にも分るほど汚れた取散らされた家の中に若々しく粧飾した若寡婦が一人であるのを不思議さうに見ながら、

「別に變つたこともないのか」と訊ねた。

「變つたことがあれば此家にかうしてゐやしませんよ」

「さっかい。叔父は何か喚出さうとするやうに家の中を見廻して、

「お前にもおすてにも別條がなければ安心だ。お前達がめい／＼の量見でどう生活を立てようともそれは自由だが、身の上に變つたことが出來りや一應俺等にも知らせて呉なければ困るぜ。俺等には智慧はなくつても、叔父姪の間だから、相談相手にならんものでもないよ」

「貴下に云はれるまでもない、私達の身の上に變つたことが出來れば早速お知らせ



しますよ」

「實は二三日前におれのところへこんな手紙が来たのだ。飯田町の今村といふ人からだが」と、叔父は懷中から出した大きな紙入の中から一通の手紙を取出した。今村は亡父の従兄のことなので、おきたは略手紙の要點を察して、ドギマギしながら、

「ぢや、おすての縁談のこととせう」と空々しく云つた。

「見合ひをするほどなら、俺等にも一應知らせて呉れてもいゝだらうに」と、叔父は手紙を開いておきたにも見せるやうに前へ出して、ところへを讀上げた。

手紙には、縁談の經過を簡単に述べて、妹よりも姉の方をお世話したいから、叔

父さんからよく當人に勧めて呉れ。自分達があまり差出がましく再縁を勧めては、心の堅い當人に氣を悪くさせて、成立つ縁までも成立たないかも知れないからと書いてあつた。

「この手紙によると、お前は大變倉田といふ人に望まれてるんださうだが、結構ぢやないか。おれは明日にでも今村さんに會つて先方の事をよく訊ねようと思つてゐるが、その前に一應お前の量見を聞いて置きたいものだね」と云つて、叔父は讀みながら手紙の文意に一々同意した。

夫の死後唯一の後楯である筈の叔父の言葉を平生は用ゐる氣のなかつたおきたも、今の場合は渡りに舟として喜んで、つまりは叔父まかせと云ふことに返事をしてしまつた。そして、妹からは月々相當に食費を取つてゐながら、おきたの貯蓄のあら方盡きかゝつてゐることをも、この先長く獨身では世を渡れない理由のやうに



打明けて訴へた。

「だから、おれが云はないこつちやない。」と、叔父は姉の身に極りがついたら、妹の方も片付けるつもりで、姉妹の唯一の後楯らしい口を利いて、おきたが急いで取つて来た酒を自分で燗をして、手酌で飲みながら、おきたの心盡くしの御馳走拵へを見てゐたが、そこへ歸つて来たおすては、叔父の顔を見ると、喜ぶよりもむしろ煩さい思ひをして、空々しく挨拶した。

「少し助けて頂戴な」と姉に云はれて、おすては酒飲家の叔父なんかを持成すためには身動きするのを忌々しく思ひながら、不承不承に煮物をしたり、膳立てしたりしてゐたが、ふと、長火鉢の側の手紙に目がつくと、その中の文面を氣に留めなうではゐられなかつた。見合ひの結果をわざ／＼叔父にまで吹聴されたのだと思ふと、いゝ氣持がしなかつた。そして、一杯機嫌になつた叔父から見合ひの筋道をく

ど／＼と訊かれさうなのが恐ろしかつたので、ひそかに姉に斷つて、後は姉にまかせて獨りで湯屋へ出掛けた。例より長湯をした上に、近所を歩廻つて時を潰して来て、勝手口からそつと臺所へ入つたが、叔父はまだ膳の側に坐つてゐた。

「早く寝かせておしまひなさいよ」と、姉を突つきながら、おすては臺所に蹲んで七輪の残り火に當つてゐた。そして、例に増した待遇にいゝ氣になつて酔つぱらつた叔父の間はず語りを聞く氣もなく聞いてゐたが、その口振では、姉の再縁は最早確定してゐることのやうであつた。死んだ姉婿の従兄が平生は文通もしない自分達の叔父へ長い手紙をやつたことゝ云ひ、叔父の上京と云ひ、この頃何となくソハ／＼して何か隠立してゐるらしい姉の様子と云ひ、自分が毎日勤めに出てゐる間に、皆ながひそかに共謀して、再縁の運びをつけてゐるのぢやないかと疑はれた。……「私をダシに使つて恥をかゝせて」と思ふと、たつた一人の姉さへも憎くて、



自分が無考へに浮々と見合なんかに出掛けたことが居ても立つてもゐられないほどに後悔された。

酔潰れた叔父を奥の間へ寝かせて、姉妹は酒の香の漂つてゐる狭い茶の間に寢床を並べたが、おすては姉との話を避けてゐた。そして一人で故郷を出て来た時にも、姉婿に死なれた時にも感じなかつた寂しい涙に枕を濡らしてゐた。

翌日は例よりもつと早く起きて、叔父が目を醒まさない前に家を出た。叔父や従兄や、殊に姉に差圖されて自分の身の處置を定められたい間、自分一人室借りでもしようといふのが、一夜思ひ悩んだ揚句の決心であつたので、店へ行くと、朋輩などに貸間の在處を尋ねた。一日も早くと心急かれて歸りには姉の親くし

一ゐる駄菓子屋の店先へ寄つて主婦に尋ねた。

「お家をお片付けになるんですか」と主婦が訝しげに訊ねると、

「私一人引越したいんですから、狭くつてもよろしんです」と、おすては明らかに答へた。

家へ歸ると、叔父はもう一晩泊るつもりで荷物を置いて出掛けてゐた。おすては餘計なことを云ひさうな叔父に會ひたくはなかつたが、遊びに行ける家は無いし、寒い風の吹いてゐる戸外を當てもなく歩く氣にはなれないので、仕様事無しに、姉の坐つてゐる温かい長火鉢の側へ寄つた。

「すてちゃんはその間に叔父さんが嫌ひなのかい。お前の爲めにならんやうなことを叔父さんは云つてゐやしないのに」とおきたは妹の不平らしい顔を見て云つた。「私叔父さんにでも誰れにでも構つて貰ひたかないわ。自分の事は先日から自分で



「ちやんと極めてゐるのよ」おすては意氣込んでさう云つて、「私、明日の日にでも此家を出て一人ぼつちになつたつて困らないやうにしてるの。私、姉さんの爲めにもその方がいゝと思つてよ」

「何故私のためにいゝのだい」

「何故だか私一人でさう思つてるんだから、さう思はせといて下さいな」

おすては頑な顔してさう云つて、頑に口を噤んでゐた。おきたも、どうせ今夜あたり叔父の口から妹に向つても再縁の事などが洩らさせるのを知つてゐるので、空々しい事を云つて妹を宥めることも出来なくつて、同じやうに口を噤んでゐた。

戸外を通つてゐる下駄の音も寒さうに響いてゐた。その一つが戸口へ留まつたので、叔父かと思つてゐると、聲を掛けて入つて來たのは、駄菓子屋の主知であつた。おすてに頼まれた貸間のことを知らせに來たのであつた。

「XXさんのお家で確な方になら二階をお貸ししてもいゝと云つてらつしやいました」と、その間取りや間代の話をした。

おすては、呆氣に取られてゐる姉を押退けて、玄關へ出て、お禮を云つて、「ちや明日、私がXXさんのお家へお伺ひしますから」と約束した。

「お前、それでいゝのかい……」と、姉は主婦が歸つた後で眉を蹙めた。

「いゝか悪いか、さうでもしなければ仕方がないぢやないの」妹は冷かにさう云つて、「叔父や従兄さんに餘計なことを云はれない先に、私の越して行く家が早く定つてよかつた。間借り生活だつていゝわ」



大正十一年三月十五日印刷  
大正十一年三月二十日發行

人さま

〔定價金五拾錢〕

著者

正宗白鳥

發行者

東京市神田區表神保町十番地  
福岡益雄

印刷者

東京市本郷區湯島五丁目四番地  
佐藤三郎

印刷所

東京市本郷區湯島五丁目四番地  
共同社印刷所

發行所

東京市神田區表神保町十

全

星

堂

電話神田 三八九三番  
三三八三番  
三三二八番



堂星金

# 名作叢書

▼森田恒友氏裝幀  
▼ボケツト形新裝美本  
▼定價各冊金五拾錢送料四錢

文藝の機運大に動くの時本叢書は破天荒の至廉なる定價を以て現文壇諸家の最も自信ある珠玉の名篇のみを提供せんが爲に生れたるものにして我が文藝の精粹を網羅す。即ち收むるところの小説及び戯曲は何れも現實の人生に徹して興味深く何人の胸にも強く強く響くと共に高朗の韻を永久の未來に傳ふ。あゝ誰か此叢書を讀まずして日本の新藝術を知れりと言ふを得んや。

1. 長篇小説	野の戀	愛慾の備みを中心としたる代表的傑作也	田山 花袋
2. 創作選集	離るゝ心	最近の力作者にして「勝敗」「復讐」の二篇を添ふ	徳田 秋聲

3. 長篇小説	人さまざま	發表の當時世評噴々たりし名篇にして附録に「妹の縁談」あり	正宗 白鳥
4. 戯曲選集	父歸る	この名篇の他に「茅の屋根」「温泉湯小景」等七篇を收む	菊池 寛
5. 長篇小説	友と友の間	友と友との戀の三角關係を描寫したる代表的力作也	菊池 寛
6. 長篇戯曲	牧場の兄弟	社會劇として上演されたる雄篇にして「地蔵教由來」を添ふ	久米 正雄
7. 創作選集	懶い春	代表的力作懶い春の他に「工廠裏にて」等數篇を收む	久米 正雄
8. 長篇小説	邪宗門	藝術の包ひ最も高き近來の珠玉の名篇なり	芥川 龍之介
9. 創作選集	銀二郎の片腕	名人の精粹を凝らせるものにして「父親」「箱根行」等を收む	里見 弴
10. 長篇小説	彼女と青年	若き男女の強い戀物語にして全卷を貫く才筆を見よ	里見 弴

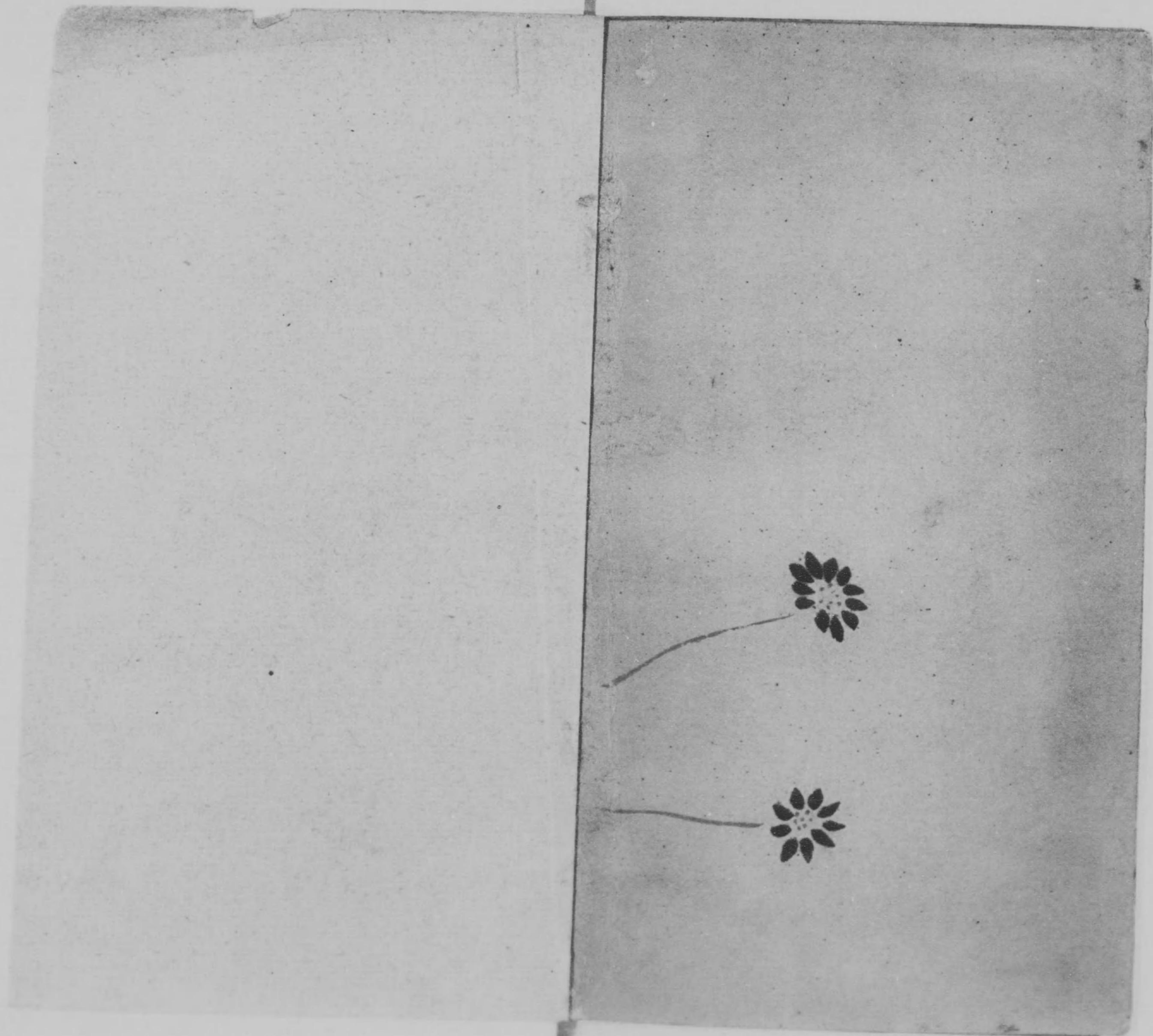


11	・長篇 戯曲	恐怖時代	深刻を極めし稀有の名脚本にして上演直に好評を博す	谷崎潤一郎
12	・長篇 小説	神童	力作中一代に傳る名作にして附録に「鶴唳」を添ふ	谷崎潤一郎
13	・長篇 小説	床	代表的傑作にして人生の全景を展開して深刻を極む	藤森成吉
14	・創作 選集	鼠	好評の傑作にして「母」「雀」の玉篇を収めたる佳品也	藤森成吉
15	・創作 選集	花と實と棘	従來の作品中より其精粹を抜きた稀有の逸也	佐藤春夫
16	・長篇 戯曲	二週間	現代劇の代表作にして附録に名曲「孔子の歸國」を添ふ	長與善郎
17	・創作 選集	恭三の父	名作恭三の父の他に代表的作品三篇を収む	加能作次郎
18	・創作 選集	祖母	發表の當時世人を驚かした名篇にして他三篇を収む	加能作次郎

19	・戯曲 選集	水のおもて	代表的名篇のみを集めたる他に類例なき脚本	久保田万太郎
20	・長篇 小説	九月	發表の當時噴々たる好評を得たる名篇にして他一篇を附す	久保田万太郎
21	・長篇 小説	或女の犯罪	深刻と凄壯を極めたる傑作にして「労働者誘拐」を収む	江口漁
22	・長篇 小説	屋根裏の戀人	作風一轉機せる代表作にして名作「あの頃の事」を附す	宇野浩二
23	・長篇 戯曲	津村教授	上演されたる名脚本にして他に「穴」の一幕物を添ふ	山本有三
24	・長篇 小説	死兒を抱いて	若き女の憐れを描きたる獨特の優秀なる作品也	廣津和郎
25	・長篇 小説	月光曲	ロマンチックなる名作にして全巻を貫く真情流露の筆致を見よ	田中純

以下續刊







389  
73



終